

原の内A遺跡

—第2次発掘調査報告書—

1983

山形県
山形県教育委員会

はら うち
原 の 内 A 遺跡

—第2次発掘調査報告書—

昭和58年3月

山形県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和57年度に実施した一般県道尾花沢～鶴子線の道路改良事業にかかる「原の内A遺跡」の第2次発掘調査の結果をまとめたものであります。

発掘調査では、縄文時代中期の住居跡をはじめ、多くの土器や石器などの出土品が発掘され、先人の歴史をたどる貴重な資料を得ることができました。幾千年のかなたで、厳しい自然と融和しながら、新しい文化を創造する先人の心豊かな、たくましい生活ぶりがしのばれる所であります。

近年、埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは、増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題が山積しております。

県教育委員会におきましては、生活文化の向上、地域環境の整備など、同じ立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保護行政のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本発掘調査にご協力をいただいた尾花沢市教育委員会並びに関係各位に感謝を申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおおかたの理解の一助となれば幸いと存じます。

昭和58年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

1 本報告書は、山形県教育委員会が山形県土木部から委託を受けて昭和57年度に実施した、一般県道尾花沢～鶴子線の道路改良事業に係る原の内A遺跡の第2次発掘調査の結果をまとめたものである。調査期間は、昭和57年9月13日から同年10月22日まで延23日間である。

2 調査にあたっては、尾花沢市教育委員会・県土木部道路建設課・県村山建設事務所などの関係諸機関並びに地元鶴子地区会の協力を得た。記して感謝申し上げる。

3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治 (山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長)

現場主任 佐藤正俊 (山形県教育庁文化課技師)

事務局 事務局長 浜田清明 (山形県教育庁文化課長)

事務局長補佐 後藤文夫 (山形県教育庁文化課長補佐)

事務局員 田内糸子 梨本 稔 中島 寛 渡辺 修
(山形県教育庁文化課主事)

4 挿図縮尺は、全体図・遺構図などは1/1000・1/400・1/60とし、遺物では土器拓影・実測図が1/4・1/6として、各挿図それぞれスケールを示した。遺物の図版縮尺は、土器・石器とも1/2・1/3を原則とした。

5 本文および挿図中の記号は、ST—住居跡・EL—炉跡・EP(P)—柱穴・EU—埋設土器、またF—遺構覆土・Y—床面である。遺物では、RP—土器・土製品・RQ—石器・石製品を示す。

6 本報告書の作成は、佐藤正俊・長橋 至が担当し、それぞれ執筆した。編集について
は佐藤正俊・渋谷孝雄があたり、佐々木洋治が総括したものである。

挿図・図版などの作成にあたっては、前田和子・吉野映子・鏡 克子・遠藤淑子・清野匡子・浦山和子がこれを補助した。また、土器実測については佐藤喜広・浅野目勇・石井浩(山形大学生)の協力を得た。

目 次

I 調査の経緯	2 遺跡の層序	5
1 調査に至る経過	3 遺構と遺物の分布	6
2 調査の経過	IV 遺構と遺物	
II 遺跡の位置と環境	1 遺構	8
1 遺跡の立地	2 遺物	18
2 周辺の遺跡	V まとめ	
III 遺跡の概観	1 遺構について	36
1 調査の方法	2 遺物について	37

挿図目次

第1図 遺跡位置・分布図	第10図 出土土器拓影図（3）	23
第2図 遺跡全体図	第11図 出土土器拓影図（4）	24
第3図 遺跡層序図（A地区）	第12図 出土土器拓影図（5）	25
第4図 B地区遺構配置・層序図	第13図 出土土器拓影図（6）	26
第5図 1～6号住居跡	第14図 土器実測図（1）・土製品他	27
第6図 7～9号住居跡	第15図 土器実測図（2）	31
第7図 10～12号住居跡	第16図 土器実測図（3）	32
第8図 出土土器拓影図（1）	第17図 土器実測図（4）	33
第9図 出土土器拓影図（2）		

図版目次

図版1 遺跡遠景・遺跡近景	図版8 11・12号住居跡全景他	43
図版2 A・B地区調査状況	図版9 第I・II・V群土器	44
図版3 調査風景	図版10 第II・III・IV群土器他	45
図版4 1号住居全景他	図版11 第III・IV・V群土器他	46
図版5 2・4・5号住居跡全景他	図版12 第V・VI・VII群土器他	47
図版6 7・9号住居跡全景他	図版13 第VIII・IX・X群土器	48
図版7 10・11号住居跡全景他	図版14 完形土器（1）	49

図版15 完形土器（2）	50
図版16 耳栓・注口土器・土偶	51
図版17 土偶・土版・土製円盤・石冠	52
図版18 石礫・石錐・石匙・搔器他	53
図版19 磨製石斧・石棒・石鎌他	54
図版20 磨石・凹石	55
図版21 凹石	56

付表目次

表-1 周辺の遺跡群一覧

表-2 原の内A遺跡（第2次）発掘調査行程一覧

表-3 完形土器・土製品・石製器出土地点一覧

表-4 磨石計測一覧

表-1 周辺の遺跡群一覧

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	原の内 A	縄・中	27	鶴子中原	縄・早
2	行沢 無	縄・早	28	原の内 B	縄・前・後・晚
3	東山	縄・早・前・中	29	〃 C	縄・早・前
4	原 A	縄・中	30	〃 D	縄・前
5	北沢 平安	31	立原 A	縄・後・晚	
6	原田中原	縄文・平安	32	〃 B	縄・前
7	下北浦 中世	33	内森谷 C	縄・後・晚	
8	ソメ C	34	〃 A	〃	
9	〃 B	縄・早・前・平安	35	〃 B	縄・早・後・晚
10	〃 A	縄・早	36	大田	縄・後
11	細ヶ谷 B	縄・前	37	八重田	縄・中
12	〃 A	縄文	38	堀之内	中世
13	袖原 F	縄・早・前	39	〃 B	縄・後
14	西浦 平安	40	鶴子無	縄文	
15	袖原 C	縄・早	41	道知山	〃
16	〃 C	縄・後・晴	42	坊の入	〃
17	〃 E	縄・前・後	43	三の又 C	〃
18	〃 B	縄文	44	熊原	縄・中
19	〃 A	〃	45	カマツ板	〃
20	南浦	縄文・平安	46	田の沢	〃
21	玉野原 B	縄文	47	田	〃
22	〃 A	縄・後・晚	48	川原	縄・中・晚
23	六沢 晚	縄・中	49	萩原 前	縄・中
24	野辺沢城	中世	50	萩原 上	縄文
25	原の内 D	縄・早	51	雨沼	〃
26	〃 E	縄文			



第1図 遺跡位置・分布図

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

原の内A遺跡は、山形県尾花沢市大字鶴子字原の内138—4他に所在する。近年、鶴子地区または隣接する細野・玉野地区では、国営鶴子ダム建設をはじめとする国営北村山農業水利事業や県営・団体営ほ場整備事業など、農林事業関係の開発事業が実施または予定されており、埋蔵文化財包蔵地と密接に係わっている。「山形県遺跡地図」(山形県教育委員会編・昭和53年)には、尾花沢市に96ヶ所余りの先史から歴史時代にかけての遺跡が明記されており、その半数以上は縄文時代の中期や晚期の包蔵地や集落跡となっている。

こうした埋蔵文化財と農林事業関係の開発事業との調整は、県教育委員会では昭和57年10月に丹生川の流域を中心とした分布調査を実施して、縄文時代中・晚期をはじめとして縄文時代早期の遺跡が多く確認され、新たに65ヶ所余りの埋蔵文化財包蔵地が発見され、今後の開発事業との調整や協議をはかる必要がある。

原の内A遺跡の一帯は、以前から土器片や石器片が県道両側の畠地より多く採集されることで知られており、地元の研究者や同好の方々によって収集され、尾花沢市内でも有数の縄文時代晚期の集落跡となっている。昭和55年には、遺跡の西側山崎地区が県営ほ場整備事業(玉野地区)に係ることになり、県教育委員会が主体となり緊急調査を実施した。その結果、縄文時代中・晚期の他、平安時代の住居跡が発見された。またむろ昭和57年には隣接するいわき遺跡や巾遺跡が、国営鶴子ダム建設や団体営ほ場整備事業に伴って緊急調査が実施され、縄文時代早期や中期の貴重な資料が得られた。

今回の調査は、県道尾花沢～鶴子線道路改良事業に係ることになり、遺跡が破壊される

図版1



遺跡遠景 (東から)



遺跡近景 (北から)

恐れがあるため、県教育委員会では昭和55年10月に遺跡詳細分布調査を実施し、遺跡の範囲や内容を明らかにした。これに基づいて、県教育委員会・村山建設事務所・尾花沢市教育委員会の関係各機関による協議の結果、事業に係る区域について記録保存を目的とした緊急発掘調査を昭和57年9月13日から実施することになった。

2 調査の経過

調査は、昭和57年9月13日(月)から10月22日(金)まで延23日間に亘って実施された。調査経過の概要は、道路改良事業に係る面積約1200m²について対象となり、第一段階から第四段階に分けて順次に進めた。なお、詳細は発掘調査行程一覧(表-2)を参照のこと。

表-2 原の内A遺跡(第2次)発掘調査行程一覧

月・日 調査内容	月				
	9月 13日～17日	9月 27日～1日	10月 4日～8日	10月 12日～15日	10月 18日～22日
準備 資材準備他 調査区設定	— —(調査区全体グリッド設定)				(機材搬入)
粗掘 粗掘作業 拡張作業	—(精査区域の確認)	—(B地区) —(A地区)			
検出 遺構確認 遺構精査・検出	←→ —(B地区面整理事業)	—(A地区面整理)			(B地区住居跡他)
遺構精査 (A地区) (B地区) 竪穴住居跡 炉跡 主要遺物取上	(石器・土器)		—(遺構検出されず) —(ST1・SX7・18) —(ST3・4・5・6)	—(B地区北側遺構確認) —(ST10・11・12) —(ST7・8・9) —(EL13・14) —(EL15) —(各住居跡内埋設土器・括土器及石器)	
実測 簡易遠方設定 平面 土層断面 レベル測定		(B地区全体層序) (主要遺物記録)	(A地区全体) (各住居跡・炉跡他層序) (主要遺物記録—各遺構内出土他)		(B地区全体) (A地区遺構)
写真 全体写真 細部写真	—(遺跡遠・近景)	—(B地区遺構確認状況) —(各住居跡全景・層序・遺物出土状況)	(A地区確認状況)		(B地区全景)
整理 遺物洗浄・注記		—(洗浄)		—(洗浄・注記)	
備考 日程概略	発掘調査開始 (第一・二段階)			10/8～13 調査資料説明成	10/20 10/21 県二級防犯認定会議参加 ○開会式・講演会 県教員懇親会 県議会参観
		—(第三・四段階)			発掘調査終了

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

尾花沢市は、出羽山地の葉山東部に位置し、大高根山地や葉山山麓が尾花沢西部地域を広く占め、ほぼ中央を北上する最上川や支流の丹生川によって限られ、尾花沢盆地が東部一帯に広範に形成されている。本地域は河岸段丘がよく発達し、盆地の東部は丹生川に沿って段丘や丘陵からなり、盆地西部は最上川に沿う河岸段丘によって占められる。盆地内で、もっとも見事に発達している段丘は、尾花沢段丘および玉野原段丘とよばれ、丹生川左岸沿いに位置し、東側の玉野原段丘では開析扇状地的な地形をとる。

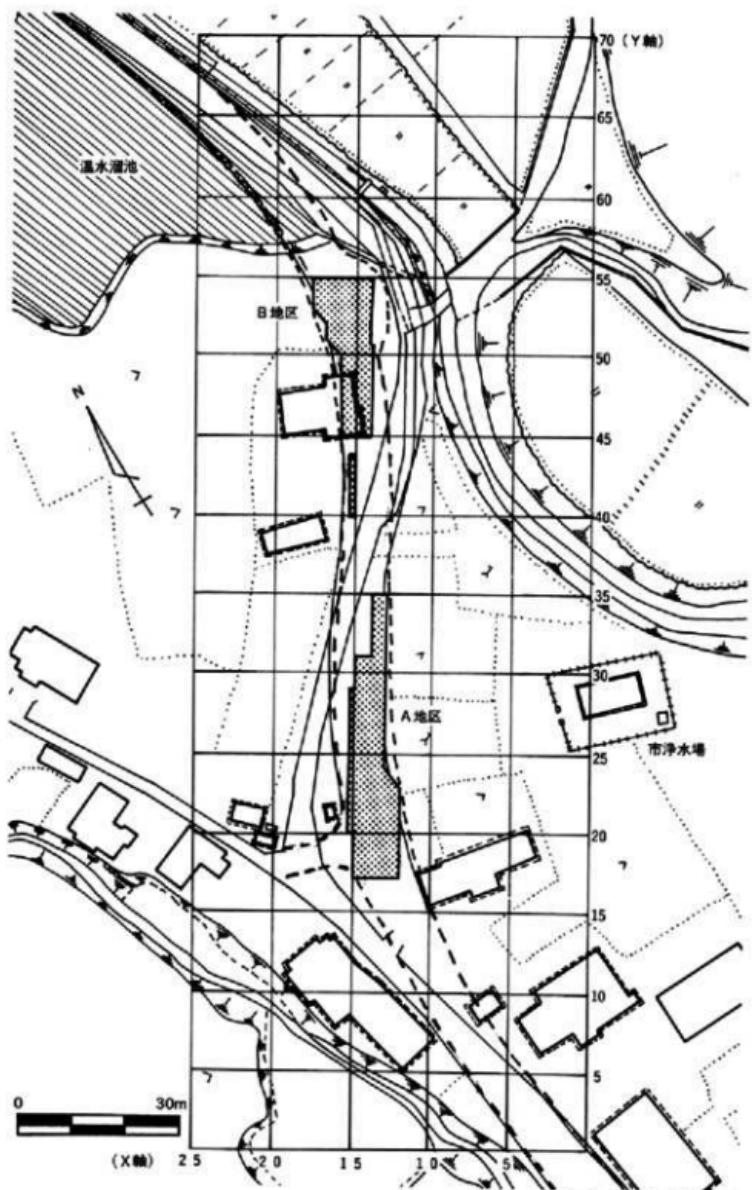
原の内A遺跡は、丹生川の左岸・河岸段丘の上段に位置し、標高241m前後を測り、東側は丹生川によって限られ、西側は丹生川の支流である網木川によって限られている。今回の調査地区は、県道尾花沢～鶴子線の両側にあたる。地目は、現在桑畠や蔬菜畠および宅地となっている。昭和55年には、県営ほ場整備事業に伴って、遺跡の西側について緊急発掘調査を実施している。

2 周辺の遺跡

尾花沢市には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」（昭和53年山形県教育委員会編）には96ヶ所の先史時代から歴史時代にかけての遺跡が明記されている。とくに、縄文時代の中期および晩期の遺跡がほとんどで、その大半が丹生川流域の段丘や丘陵部を中心に偏在している。また、昭和57年10月には農林事業関係の分布調査を丹生川流域を中心に実施して、新たに65ヶ所余りの遺跡を発見し、縄文時代中期や後期の遺跡に加えて、縄文時代早期の遺跡が主に発見されている。

本遺跡は、昭和55年に緊急発掘調査（第1次調査）が実施され、縄文時代中期や晩期の住居跡が検出され、また平安時代中頃の住居跡7軒が発見され、この地域における平安時代の様相を知るうえで貴重な資料を与えた。さらに昭和57年には、いるかい遺跡や巾遺跡の緊急発掘調査がなされ、いるかい遺跡では縄文時代前期や後期の住居跡・土壙などが発見され、また縄文時代早期の貝殻条痕文や爪形文などの土器片が多く出土し良好な資料が得られている。巾遺跡では縄文時代中期の土壙や埋設土器などが発見され、大木7bから8bにかけての時期であり、今回の原の内A遺跡の調査区と同様な様相がみられる。

このように、尾花沢市の遺跡全体をみた場合、その8割までが縄文時代の中期中葉や晩期前半頃のものが多く、古墳時代や奈良・平安時代の遺跡が少なく、若干原の内A遺跡での集落が明らかになった程度で、まだ不明な点が多い。



第2図 調査区全体図

III 遺跡の概観

1 調査の方法

今回の緊急発掘調査は、原の内A遺跡の北東側地区にあたる県道道路改良事業地区の幅員約10m・長さ約120mで、発掘対象面積が約1200m²について実施し、とくに遺構や遺物が密集する区域（精査区域）を重点に発掘調査を進め、現県道を境として南側をA地区、北側をB地区とした。A地区精査面積約378m²で、B地区の精査面積が約261m²であり、A・B地区を合せて約639m²の精査面積を調査したものである。（第2図）

発掘調査は、事業区域内の全体にグリッドを設定し、グリッドの基線は道路のセンター杭に基点を設けて15—50グリッドとして、グリッド基線のY軸方向はN-30°Eを計り3×3mを1単位とするグリッドを設定する。遺跡の北東側のB地区からA地区に向けて粗掘作業を開始し、それぞれの地区を拡張し、精査区A、B地区を設定し調査を実施した。

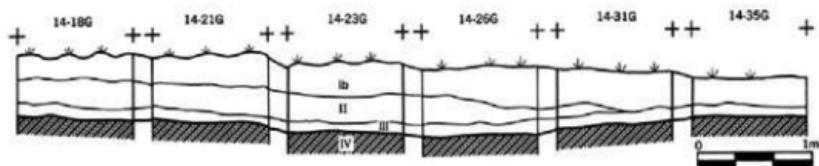
調査の進行状況は（表-2）、第一段階で井桁状に3×15mあるいは3×9mのトレンチを入れ遺構・遺物の密集地を確認する粗掘作業を実施し、第二段階は確認した密集地を拡張し遺構を確認し、第三段階では遺構の精査・検出を、第四段階で記録作業を実施する。

2 遺跡の層序

本遺跡は、丹生川によって開析された洪積河川段丘上に立地し、全体として南西側から北東側にかけて傾斜している。遺跡中央部から南東側がやや微高地状になっている。

基本的な遺跡の層序は、次の5層に大きく分けられる。（第3・4図）

- Ia層 褐色土 客土。B地区宅地付近にみられる。厚さ25~35cmである。
Ib層 暗褐色土 烟地による耕作土。A地区南側で厚く堆積している。厚さ20~32cm。
II層 黒褐色土 微砂質で炭化粒子を含み軟らかい。B地区的Y軸50列以上では耕作によりほとんど削平されている。遺物包含層で厚さ15~39cmである。
III層 褐色土 粘質微砂土で堅くなっている。IV層の漸位層である。B地区的遺構確認面である。
IV層 黄褐色土 ローム質で砂質性に富む（地山）。



第3図 遺跡層序図（A地区）

3 遺構と遺物の分布

(1) 遺構について（第4図 図版2）

本遺跡で検出した遺構については、竪穴住居跡12・不明遺構2である。A地区では遺構が検出されず、わずかに縄文時代中期や晚期前葉の土器片が出土したのみである。B地区では、縄文時代中期中葉の住居跡・不明遺構が検出されている。

B地区的遺構の分布状態は、いずれも縄文時代中期中葉頃の住居跡がそれぞれ重複し、南北方向に連続してみられる。やや平坦面に位置する住居跡は、1・2・3・5・6号住居跡であり、調査区の中央部から南側寄りに在る。若干の傾斜地に在る住居跡は、7・8・9・10・11・12号住居跡で、調査区の北側から中央部にかけて位置している。炉跡は、2・6・9・11号住居跡で検出され、地床炉は6号住居跡のみで、2・9・11号住居跡では石囲炉となっており、いずれも炉跡は、住居内の中央部に位置せず、壁際に寄って造られているのが特徴である。土壤は検出されていない。

不明遺構は、B地区的南側に位置して、平面形はいずれも不整形を呈し、縄文時代晚期前半の時期である。

(2) 遺物について（第4図）

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に約90箱を数え、縄文式土器（中期中葉および晚期前半）・石器・土製品・石製品などに分けられ、そのほとんどは住居跡内や遺物包含層から出土している。他に擾乱層（I a層）から平安時代土師器の壺片1点が出土した。

A地区的出土状況は、中央部から北側にかけて縄文時代中期や晚期が混在し若干出土するが、南側にかけてはほとんど出土していない。B地区では、北側から順次型式が新らしくなり1号住居跡付近では、中期中葉でも新しくなっている。

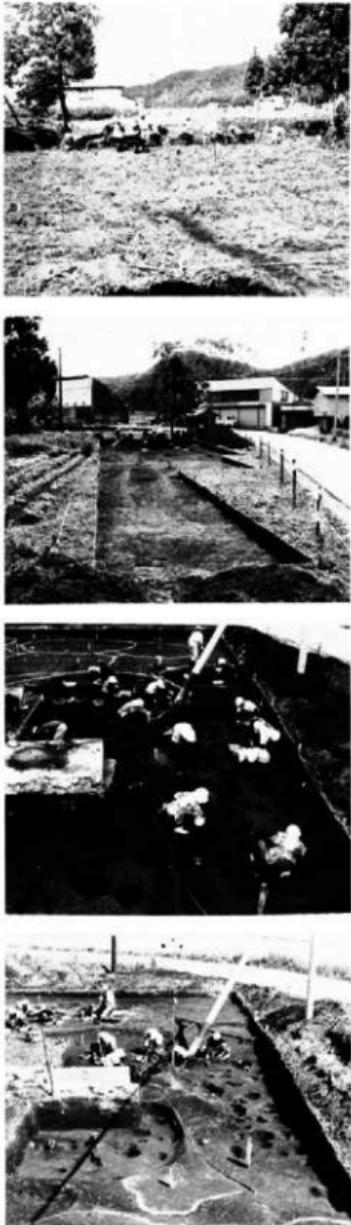
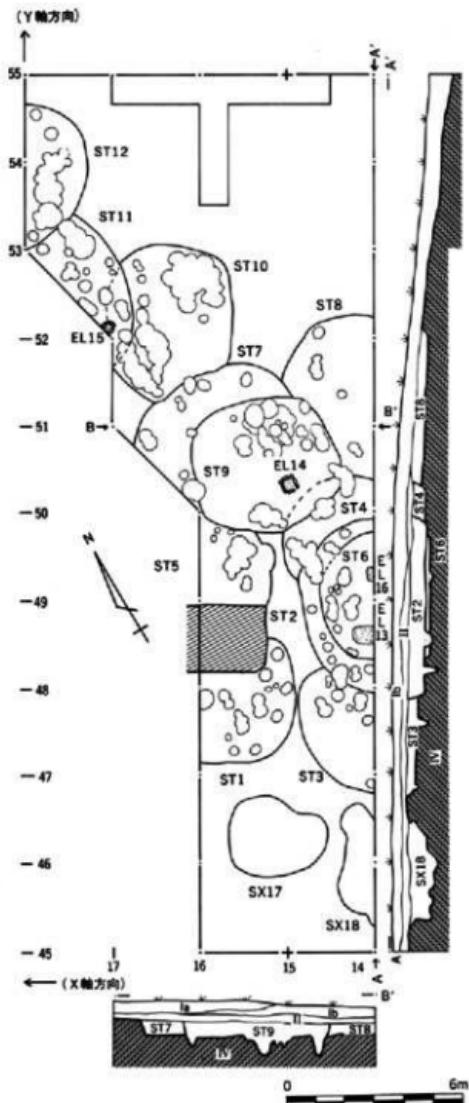
図版2



A地区調査状況



B地区調査状況



第4図 B地区遺跡配置・層序図

IV 遺構と遺物

1 遺構

1号住居跡（第5図 図版4）

B地区・拡張区の南側の平坦地、15・16～48・49グリッド内に位置し、東側で2号住居跡や3号住居跡と接し、北側で恐らく重複している。遺存状態は、北側で井戸によりまた東側では30cmの幅で水道管付設のため、IV層中まで掘り下げられて攪乱している。他はほぼ良好である。確認面はII層下部で、検出面はIII層上面である。住居跡の床面構築はIV層中を8～12cm掘り込んで造られている。北側と西側は未調査で全体の1/2を調査したのみである。

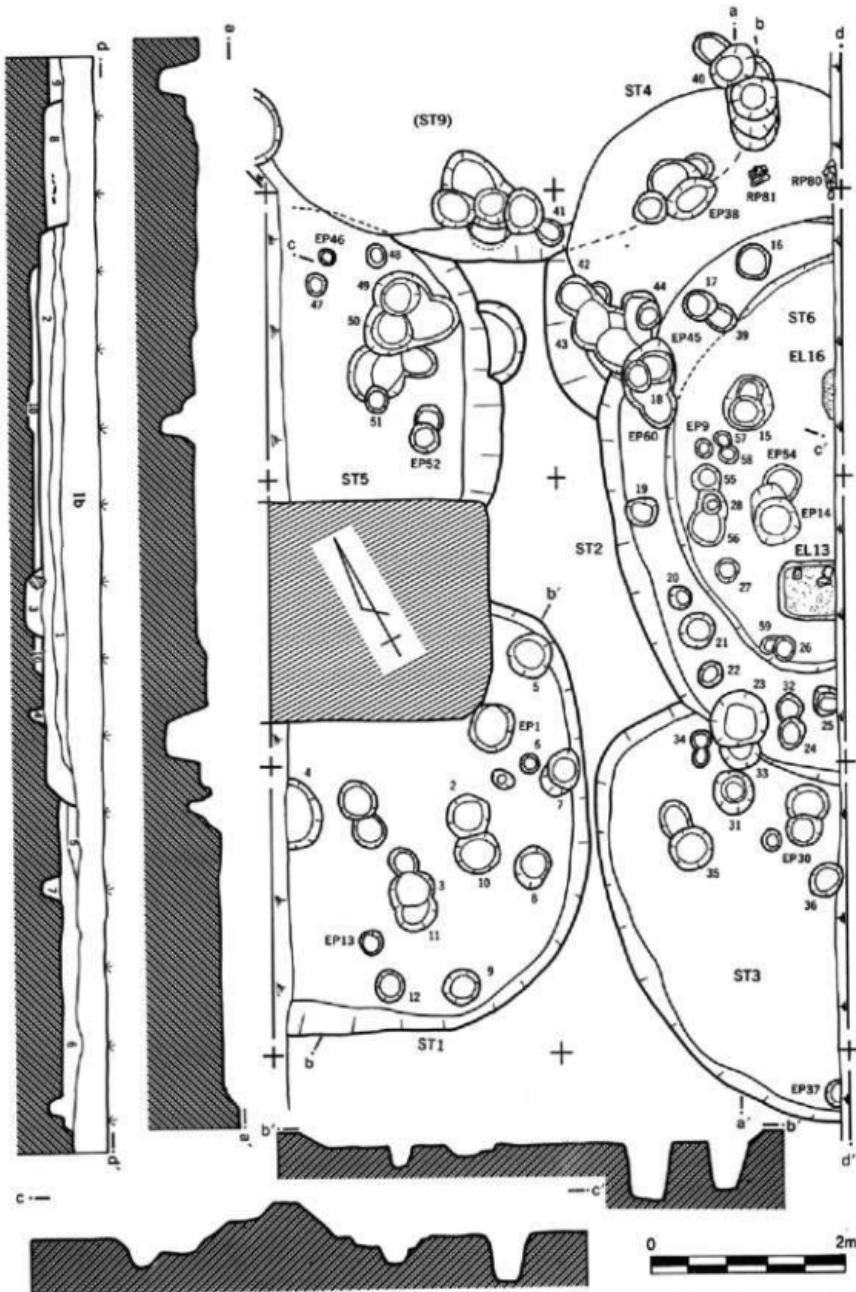
平面形は、南側や西側の中央部がやや直線的になる不整円形を呈している。大きさは推定4.30～4.50mを計るとみられ、確認面から床面までの深さは18～26cmである。壁は緩やかに掘り込まれ、とくに南側では搔鉢状になってなだらかである。現存する壁高は12～27cmとなっている。周溝および壁溝は検出されていない。床面の状態は、住居跡中央部と南側のE P 12・13の西側がやや高く凹凸があり堅く踏みしめられている。その他はほぼ平坦で軟弱である。炉跡は、この段階では確認されておらず、恐らく西側の未調査区に在るとみられる。柱穴は、E P 1～13で13本検出される。主柱穴は、E P 1～4で径34～58cm・深さ42～65cmで、住居跡の中央部付近にあり住居プランと同心円状に巡るとみられる。支柱穴は、E P 5～9で5本確認され径22～43cm・深さ32～43cmで壁際に沿って在る。その他E P 10・11は、覆土中に黄褐色土が堆積し、その状態からみてそれぞれE P 2・3と対応し、抜き取りの柱穴とみられる。またE P 12・13は、径29・32cm・深さ24cmと類似し、床面の状態から考慮すると出入口を構成する柱穴である。

遺物の出土状態は（図版4），住居跡の中央部・覆土中層から小形の深鉢土器等を中心に、磨石や凹石と同時に遺物の廃棄現象が認められる。本住居跡と3・5号住居跡との新旧関係は、土層観察により本住居跡は3・5号住居跡よりも新しい。本住居跡の時期は、出土土器からみて、縄文時代中期大木8b式期に相当する。

2号住居跡（第5図 図版4・5）

B地区・拡張区の中央部の平坦地、15～47～50グリッド内に位置し、3・4・6号住居跡と南側や北側などで重複し、西側や北側で1・5号住居跡と接している。東側は未調査の

（第5図層位の説明） 1～4：2号住居跡 5～7：3号住居跡 8：4号住居跡 9：8号住居跡 10：6号住居跡
1 黒褐色土（炭化粒子・風化繊維を含み堅い） 2 喰褐色土（炭化粒子を多く含み軟らかい） 3 喰褐色土（燒土粒子を含む）
4 黑褐色土（軟らかい微細質土） 5 黑褐色土（炭化粒子・粘土ブロック有り） 6 黑褐色土（粘土ブロックを多く含む） 7 喰褐色土
8 喰褐色土（炭化・風化繊維を含み堅くしまっている） 9 喰褐色土（微細質で堅い） 10褐色土（黒色土や粘土ブロック
が混り堅い）



ため全体の約3分の1を明らかにした程度である。遺存状態は、部分的に擾乱を受けている他はほぼ良好である。確認面はII層下部で、平面形の検出した面はIII層中である。住居跡の構築は、IV層中を12~28cm掘り込んで床面を構成している。

平面形は、西側がやや脹らみをもつ不整の楕円形を呈すると考えられる。大きさは長径推定6.00m前後を計るとみられ短径は不明である。確認面から床面までの深さは29~38cmである。壁は、西側から南側にかけては緩やかに掘り込まれ、北東側ではほぼ垂直に掘り込まれており、壁体は南側で堅くなっている他は軟弱である。現存する壁高は33~35cmとなっている。床面の状態は、中央部（6号住居跡と重複する部分）で黒色土や黄褐色粘土ブロックが混り堅く踏みしめられ若干の凹凸も認められる。壁付近では、E P19からE P21にかけては堅くなっているが、他は軟弱であり平坦である。周溝や壁溝は認められなかった。柱穴は、E P14~28で15本検出されてその大半が支柱穴あるいは壁柱穴とみられる。主柱穴は、E P14・15で径41~63cm・深さ60~68cmで、住居跡のほぼ中央に位置しそれぞれ対応している。E P23は径61cm・深さ70cmであり支柱穴と判定するよりも主柱穴と考えられる。支柱穴はE P16~22・24~28で径22~36cm・深さ24~52cmを計る。壁付近に沿って巡るE P16~22・24とさらに住居跡中央部付近で弧状に回るE P25~28がある。

炉跡（E L13）は、住居跡の中央部寄りから南側に位置し、北側で角柱・円礫が3個残り、全体的に礫が抜き取られている石囲炉である。大きさは短軸径63cm・床面からの深さ16cmで長軸方向N—58°—Wを計る。なお長軸径は不明である。平面形は、ほぼ方形を呈し掘り込みの状態はほぼ垂直となっている。南側や西側で石の抜き取り痕とみられる小ピットが認められる。底面は、平坦で中央部が僅か焼けただれている程度である。焼土の堆積は余りみられない。

遺物の出土状態は、1号住民跡と同様な状態を示す。本住居跡の時期は、縄文時代中期大木8b式期に相当する。

3号住居跡（第5図 図版4・5）

B地区・拡張区の南側の平坦地、15~48・49グリッド内に位置し、西側で1号住居跡と北側で2・6号住居跡と隣接あるいは重接あるいは重複している。遺存状態は、西側で30cm幅の水道管付設のためIV層中まで掘り下げられて擾乱を受ける。確認面はII層下部で、平面形の検出した面はIII層中である。住居跡の床面構築は、IV層中を5~9cm掘り込んで造られている。東側は、未検出である。

平面形は、北側が隅丸方形状になる不整円形を示すと考えられる。大きさは径4.80~5.00m前後を計るとみられる。確認面から床面までの深さは12~18cmである。壁は緩やかに掘

り込まれ、とくに西側は傾斜している。現存高12~16cmを計る。周溝・壁溝は検出されなかった。床面の状態は、E P35の西側から壁際で若干の起伏がみられる程度で、概ね平坦で軟弱である。柱穴は、E P30~37で8本検出され北側に片寄っている。主柱穴は2本認められ、E P30・31で径36~48cm・深さ52~53cmである。支柱穴はE P32~37で径22~40cm・深さ22~31cmであり、E P32・34・37は壁際に寄って在る。炉跡については、未確認である。本住居跡の時期は、出土土器からみて縄文時代中期の大木8b式期に比定される。

4号住居跡（第5図 図版5）

B地区・拡張区より中央部の平坦地、15—50・51グリッドに位置し、南側で2・6号住居跡と北側で8・9号住居跡と重複している。遺存状態は、北側の9号住居跡と重複する部分が電柱設置のため2×2mの範囲でIV層中まで掘り下げられて擾乱を受ける。他はほぼ良好である。確認面はIII層下部で認められ、床面の構築はIV層中を22~34cm掘り下げて造られている。東側は未検山である。

平面形は、西側壁および柱穴の配列からみて円形を呈するものである。大きさは推定径3.50m前後を計るとみられ、確認面から床面までの深さは18~21cmである。壁は西側のみで明確に検出され、擂鉢状に掘り込まれており、現存高32cmである。周溝・壁溝は認められない。床面の状態は、北東側が非常に堅く踏みしめられ起伏があり、他はほぼ平坦で軟弱である。炉跡は確認されていない。柱穴はE P38~45で8本検出され、E P38・39が主柱穴で、径32~43cm、深さ38~42cmである。支柱穴は壁際に巡るようにE P40~45であり径29~41cm、深さ29~39cmである。

本住居跡は、出土した土器からみて縄文時代中期大木8a式期に相当する。

5号住居跡（第5図 図版5）

B地区・拡張区の中央部の平坦地、16—49・50グリッド内に位置し、南側で1号住居跡と東側で9号住居跡と重複している。遺存状態は水道管付設や覆土中層まで擾乱を受けて余り良くない。確認面はIII層中で確認され、確認面からの深さは37~42cmである。床面はIV層中を掘り込んで造られている。全体の4分の1程度検出したものである。

平面形は東側に張り出し部を有する円形を呈すると考えられる。大きさは不明である。壁は、擂鉢状に掘り込まれ軟弱である。床面はほぼ平坦で軟弱である。床面はほぼ平坦で軟弱である。柱穴は7本検出され、E P46~52でいずれも支柱穴とみられる。炉跡は検出されていない。

本住居跡は、出土した土器からみて縄文時代中期大木8b式に相当する。

6号住居跡（第5図 図版5）

B地区・拡張区の中央部の平坦地、15-49・50グリッド内に位置し、2・3・4号住居跡とそれぞれ重複している。全体の2分の1を検出したものである。遺存状態は、ほぼ良好である。2号住居跡を精査・検出する際に確認される。2号住居跡床面からの深さは、10~12cmである。

平面形は、南側が矩形状になる不整形を呈するとみられる。大きさは径4.00m前後を計る。壁は、現在する壁体からみてほぼ垂直に掘り込まれて、やや堅くなっている。周溝および壁溝は認められない。床面の状態は、住居跡東側や炉跡付近で若干の凹凸がみられるものの、全体として平坦でやや堅くなっている。柱穴は、E P53~60で8本検出されている。柱穴は、E P53・54で径25cm前後・深さ42cmであり、2号住居跡の主柱穴E P14・15と重複している。支柱穴はE P55~60で径21~34cm・深さ24~39cmであり、E P55・56・59は壁付近に位置し、弧状となっている。

炉跡（E L16）は、住居跡の中央寄りから北側に位置し、若干の掘り込みを有する地床炉である。なお、東側は未検出のため詳細は不明である。焼土は若干堆積している程度である。

本住居跡の時期は、出土した土器から縄文時代中期大木8a式期に相当する。

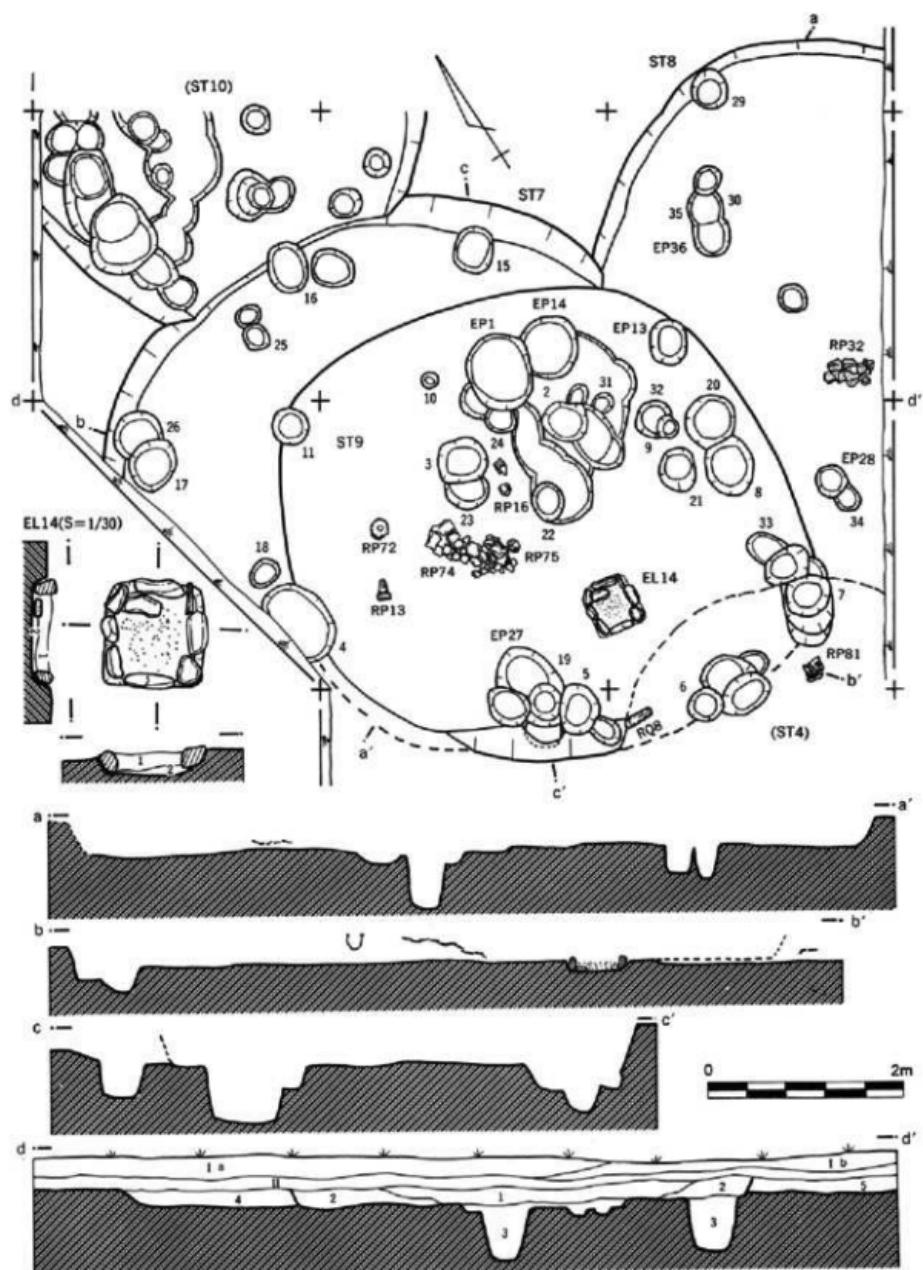
7号住居跡（第6図 図版4・5）

B地区・拡張区の平坦地から緩傾斜地、15~17-50~52グリッド内に位置し、東・南側で8・9号住居跡と、北側で10号住居跡とそれぞれ重複している。北側と東側の一部で擾乱を受けている他はほぼ良好である。確認面はIII層下部であり、住居跡の床面構築はIV層中を14~20cm掘り込んでいる。西側の一部が未検出である。

平面形は、北側半分域と東側から南側の柱穴の配列からみて円形を呈している。大きさは長径5.60m・短径5.45mを計る。壁は北側半分域で検出され、緩やかに掘り込まれており、壁体も軟弱である。現存する壁高は14~18cmである。周溝・壁溝は検出されていない。床面の状態は、E P25付近で凹凸が認められる他は、ほぼ平坦で軟弱である。柱穴は14本検出されてE P14~27である。主柱穴は、住居跡の中部には認められず壁際に沿って位置するのが特徴であり、E P13~17・19・20で7本検出され、径39~62cm・深さ32~61cmである。支柱穴は、E P21~27で住居跡の中央部寄りから東側に集し、径21~29cm・深さ15~29cmである。本住居跡は、出土土器からみて縄文時代中期大木8b式に相当する。

（第6図層位の説明） 1~3：9号住居跡 4：7号住居跡 5：8号住居跡

1黒褐色土（炭化・風化鉱粒子を多量に含み堅い・微砂質土） 2黒褐色土（1層と近似するが炭化粒子をさらに含む） 3暗褐色土（炭化粒子を含み軟らかい） 4暗褐色土（炭化粒子を含み堅い） 5暗褐色土（微砂質で粘土ブロックを含み堅い）



8号住居跡（第6図 図版5）

B地区・拡張区の中央部の平坦地から緩傾斜地、15・16-51~53グリッド内に位置し、4号住居跡や7・9号住居跡と隣接あるいは重複している。東側半分は未検出である。遺存状態は、北側半分域が畑地耕作時によりIV層まで削平されており、余り良くない。確認面はIV層上面であり、住居跡の床面はIV層上面を若干掘り込んでいる程度である。

平面形は、現存する北壁や柱穴の配列から考慮して不整円形を呈している。大きさは長径推定5.20m前後で短径は不明である。確認面からの深さは18~22cmである。壁は北壁の状態からみて、緩やかに掘り込まれ壁体は軟弱である。周溝および壁溝は検出されていない。床面の状態は、住居跡の中央部がやや高くなり、北壁付近で低くなっている。柱穴はE P 28~33で6本検出されており、径25~36cm・深さ26~34cmである。柱穴の配列状態は不規則になっており詳細は不明確である。炉跡は確認されなかった。

本住居跡は、出土した土器からみて縄文時代中期大木8a式に相当する。

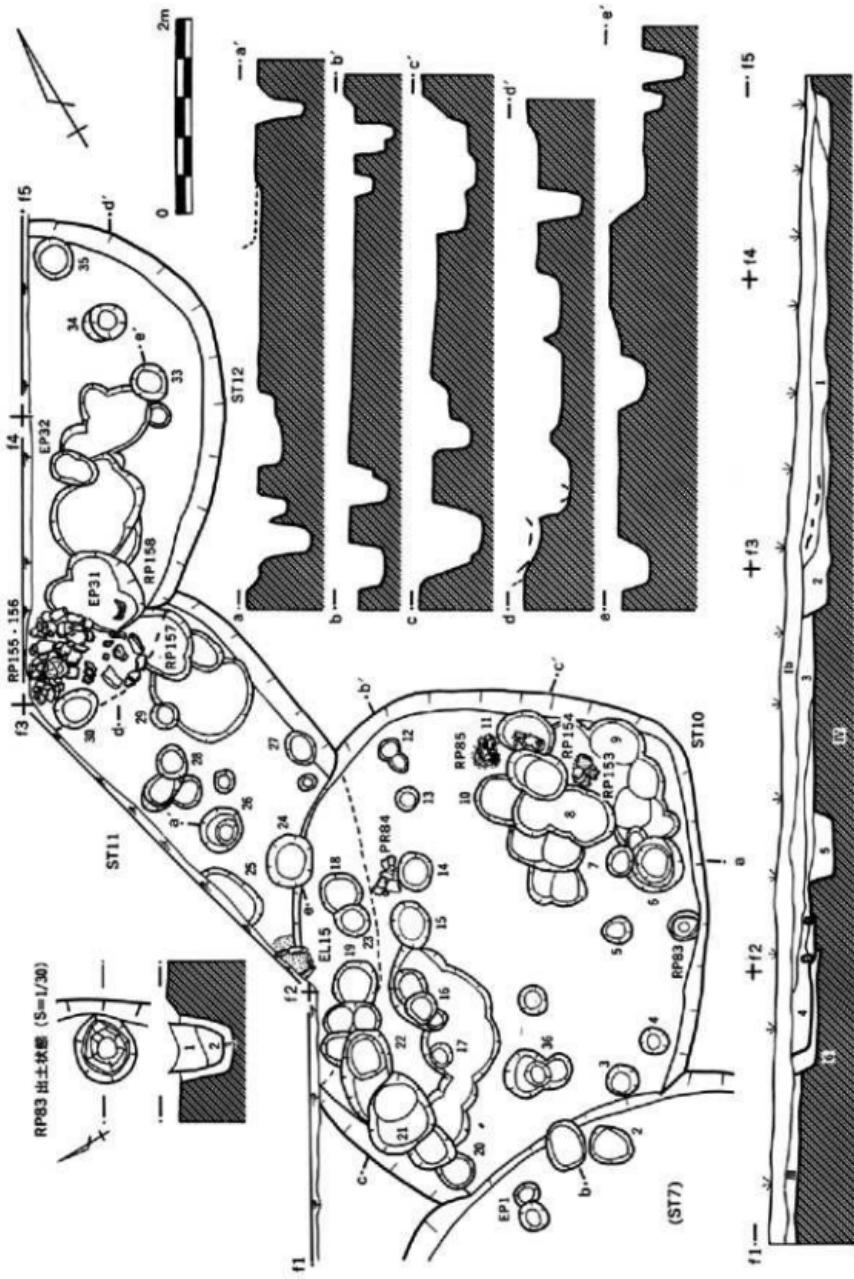
9号住居跡（第6図 図版5・6）

B地区・拡張区の中央部の平坦地、15~17-50~52グリッド内に位置し、南側で4・5号住居跡や北側で7号住居跡や東側で8号住居跡とそれぞれ重複している。遺存状態は、E L15の東側で2×2mの範囲で電柱が設置され、IV層中まで掘り下げられ擾乱している。他はほぼ良好である。確認面はII層下部で、住居跡の床面構築はIV層中を5~8cm掘り込んで造られている。

平面形は、柱穴の配列状態や床面の検出状況から考え合せ、やや方形を示すような不整円形を呈している。大きさは長径5.28m・短径5.91mを計り、確認面からの深さは約23cm前後になる。壁は、南側を検出したのみで擂鉢状を示し、軟弱である。他は暗褐色土のため不明瞭である。周溝および壁溝は認められない。床面の状態は、炉跡の西側から南側およびE P 6・7の間で起伏があり非常に堅く踏みしめられ、E P 6・7の間では黒色土や黄褐色土ブロックが混在して認められ貼り床の状態となっている。他は若干の起伏がみられるものの軟弱である。柱穴は、E P 1~13で13本検出されている。主柱穴は、E P 1~8で径54~82cm・深さ42~82cmを計る。E P 1・4・8は東・西・南側に在りほぼ三角形状に配置しており、E P 3・2・8とE P 5・6・7は直線的に並行関係にあり、それぞれ対応して配列している。支柱穴はE P 9・10で径22cm・深さ26cmとなっている。壁柱穴は、

（第7回著位の説明） 1・2:12号住居跡 3~5:11号低窓跡 7:10号住居跡

1 黒褐色土（炭化粒子を含み軟らかい） 2 黑褐色土（1層に近似、炭化粒子が多くなる） 3 黑褐色土（炭化、黑化颗粒を含み堅い） 4 喀褐色土（炭化粒子多く含み軟らかい） 5 喀褐色土（炭化、燒土粒子を含む） 6 6 喀褐色土（炭化粒子・粘土ブロックを含む） 7 暗褐色土（炭化粒子や粘土ブロックを含み堅い）



第4図 10~12号住居跡

主柱穴 E P 1・4・8 と逆転して位置し、逆三角形状に配されており、径39~46cmで深さ31~37cmを計る。

炉跡 (E L14) は、住居跡の南側壁付近に位置する石囲炉である。大きさは長軸56cmで短軸54cm、床面からの深さは約21cmで長軸方向はほぼ南北を示す。平面形はほぼ正方形を呈している。床面からの掘り込みはほぼ垂直になっている。礫は、長さ30cmの楕円礫や18cmの円礫などの河原石を使用して、規則的に配置している。底面はほぼ平坦で、特に中央部は焼けただれている。礫も全体的に焼成を受けている。

土器の出土状態 (R P72~76) は、住居跡の西側から中央部にかけての覆土1層より出土し、R P72は正位の状態にあり口縁部が欠損し、R P73は横位の状態で出土している。またR P74~76は、ほぼ北側より一括に廃棄した状態で出土している。

本遺跡の時期は、出土した土器からみて縄文時代中期大木8b式期に比定される。

10号住居跡（第7図 図版7）

B地区・拡張区の北側寄りの緩傾斜地、15~17-52~53グリッド内に在り、南側で7号住居跡や北側で11号住居跡と重複している。遺存状態は、畠地耕作により住居跡中層まで削平を受けており、余り良くない。確認面はIV層上面で、住居跡の床面はIV層を掘り込んで造られている。

平面形は、北東側が直線状を示す不整の楕円形を呈している。大きさは長径6.42m・短径4.36mを計り、確認面から床面までの深さは18~24cmとなっている。壁は、全体に緩やかに掘り込まれておらず、軟弱である。現存する壁高は16~23cmである。周溝や壁は検出されなかった。床面の状態は、西側がやや高くなり東側にかけて低くなり、軟弱であるが、東側壁寄り中央部は凹凸がみられ堅く踏みしめられている。柱穴はE P 1~21で21本検出されている。柱穴は住居跡の中央部には余り認められず、中央部から壁際にかけて位置している。E P 4~9とE P 12~17はそれぞれ直線的に配され並行する関係にあり、いずれもが対応し、E P 3・36がさらに対応しており、これら柱穴の配列を考えると、ほぼ楕円形状に巡っている。また同様にE P 1・2やE P 18~21の関係では、住居跡の西側から南側にかけての壁際に位置している。このように、柱穴の配列状態から考え合せると、本住居跡は西側から南側にかけて拡張しているとみられる。柱穴の大きさは、径32~61cm・深さ39~82cmを計る。炉跡は検出されなかった。

土器の出土状態は、R P83（第7図中）では住居跡の東側中央部壁体に接してある埋設土器である。出土の状態は、ほぼ正位の状態にある深鉢形の土器で、土器の囲りにはある程度の掘り方を有している。覆土は、1層暗褐色土(炭化粒子や風化礫粒が混り軟らかい)

2層褐色土(微砂質土で軟らかい)・3層褐色土(褐色・黃褐色土ブロックが混入)である。土器の底部には多量の炭化物が付着している。R P 84・85・153・154は押し潰された状態で床面より出土し、恐らく一括廃棄されたものと考えられる。

本住居跡は、出土した土器群からみて縄文時代大木7b式期に比定される。

11号住居跡(第7図 図版8)

B地区・拡張区の北側の緩傾斜地、52~53-17・18グリッド内に在る。南側で10号住居跡や北側で12号住居跡と重複している。遺存状態は10号住居跡と同様に余り良くない。確認面はIV層層上面で、床面の構築はIV層を掘り込んで造られている。東側の約4分の1程度検出したのみである。

平面形は、東側の壁および柱穴の配列からみて不整の円形を呈していると考えられる。壁は、東側の一部で検出されたのみで擂鉢状に掘り込まれ、壁体も軟弱である。周溝・壁溝は認められない。床面の状態は、ほぼ平坦で軟弱である。柱穴はE P 21~31で、10本検出されている。径25~64cm・深さ34~72cmを計る。主柱穴は、E P 22・24・31で壁際に片寄っており、7・9号住居跡と類似性が認められるが、全般的な柱穴の配列は不明である。

炉跡(E L15)は、住居跡の南側壁付近に位置している石閉炉である。西側は未検出のため詳細は不明であるが、礫の配置は橢円形状に配されるとみられ、短軸38cm・床面からの深さは10cmを計る。底面は全体的に焼けただれ、一部住居床面も焼けており、礫も2次成を受けている。

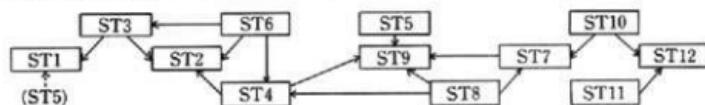
本住居跡は、出土した土器からみて縄文中期大木8b式期に相当する。

12号住居跡(第7図 図版8)

B地区・拡張区の北側の緩傾斜地、18-53-55グリッド内に在る。遺存状態や確認面は、11号住居と同様である。周溝や壁溝および炉跡は確認されなかった。

平面形は、不整円形と呈すると推定され、大きさは長径7.12m・深さは34~41cmを計る。壁は緩やかに掘り込まれ軟弱である。床面はほぼ平坦で軟弱である。柱穴はE P 32~35で4本検出され配列の状態は不明である。R P 155~158は、南側より一括して廃棄された状態で出土している。本住居跡の時期は、縄文時代中期大木8b式期に比定される。

*今回の調査で検出された住居跡の新旧関係は下記の図式となる。(矢印の方向は旧→新である)



2 遺物

(a) 土器 (第8~14図 図版9~13)

出土した遺物は整理箱に約90箱を数え、そのほとんどが土器である。土器片は耕作により原位置から移動したものもかなりあり、それらは包含層出土として扱い、今回は明確に住居跡覆土中より出土したものを中心取り上げた。住居跡は1号~12号まで12棟検出されたが、そのうち、土器の分類基準として9号住居跡出土の土器片を主体的に抽出し、他の住居跡出土の土器片については9号住居跡出土土器の分類に適合しないものすべてを別個に取り上げ全体の分類を構成した。なお、縄文原体は施文された方向で書き表わすこととした。土器片は第I群~第IX群まで大別した。

第I群土器 櫛糸圧痕文を主たる文様要素とする。

1類(1)口縁部に粘土紐による山形の隆帯が貼付され、さらにその上面に平行に2~3条の圧痕がみられる。

2類(2・3)小波状口縁をなし、口縁部は「く字状」に屈曲する。圧痕は口縁部で横走、体部上半で連弧文が描出される。

3類 口縁部に圧痕が横走する。

3a類(4~9)口縁部に1~数条の圧痕が横走し、体部は単節の斜位・縦位の縄文が施文される。

3b類(10~17)口縁部に隆帶あるいは粘土紐貼付による橢円形の枠状文が構成され、内部に圧痕が横走する。12は浅鉢である。10・13・14は隆帶上に縦位の圧痕を施す。17は枠状文の区画単位接点から「Y字状」に隆線が垂下し、隆線上に体部地文と同様に縦位LR縄文が施文される。この施文技法は19・74・91等と、文様構成としては59と共通しよう。

4類(18~20)波状口縁の大形の深鉢。18は粘土紐貼付により縦方向に橢円状の文様がつけられ、その隆線上から枠内を埋めるように横位縦列に短い櫛糸が圧痕される。20は圧痕文自体で文様を表現しており、I群5類と共通する。

5類(21~23)圧痕文が口縁から体部に施文され、主体的な文様を構成する。21は浅鉢で体部文様は4単位で構成され、十文字状に口縁部から垂下する。22・23はキャリバー型の深鉢で連弧文が施文される。

6類 縦位並列の圧痕が施文される。

6a類(25・26・36~39)主に口縁部に波状に粘土紐が貼付されるものとの組合せがみられる。さらに貼付文上に圧痕がつけられるもの、縄文が施文されるものの2者に細別できる。前者は25・26・36、後者は37~39。

6b類(28~30)口縁部に圧痕される。隆線・沈線との組合せはみられない。

6 c 類 (31~33) 隆帶上の押圧あるいは刺突、さらに粘土貼付、沈線との組合せがみられる。

6 d 類 (34・35) 口縁部に S 字状のモチーフが隆帶で描出される。

6 e 類 (40~49) 粘土紐貼付による波状文との組合せがみられる。波状口縁、突起のつくもの (40~42)、口唇部が肥厚しながら外反し口唇部に S 字文や波状文が貼付されるもの (43~45)、刻目文との組合せ (40)、S 字状の隆帶との組合せ (49) もみられる。

第II群土器 棒状工具や竹管先端による刺突・刻目が施される一群。

1 類 (50~55) 器形は波状口縁の深鉢。波頂部に数条の刻目が施される特徴を有する。他の文様は粘土紐貼付や沈線 (50・これは I 群 3 b 類 17, 同 4 類 19, 第III群 1 類の土器と共通する)、貼付後の側縁調整 (51・52・54)、あるいは沈線のみ (53) 等のバリエーションがみられる。

2 類 (56) 口縁部に先端のやや太い工具で刺突される。56は鋸歯状を示す。

3 類 (58 a + 58 b + 59) 口縁部に突起を有し、粘土紐貼付による種々のモチーフが突起の内外面に描出され、口縁部に刻目あるいは刺突文が組み合わせられる。

4 類 (60・61) 押し引きによる刺突文を特徴とする。体部地文は縦位 L R + I r 繩文。

5 類 (62~64) 半截竹管による C 字状の爪形文が施文される。

6 類 (66) 口縁部に粘土紐貼付で横位に区画された内部に細い刻目が施文される。66は縦位並列の撫糸圧痕との組合せである。体部は L R 繩文。

7 類 (59・65・67~69) 小波状を呈する交互刺突文がみられるもの。貼付文、両側縁調整、沈線との文様描出の組合せがある。69以外は文様描出後に体部地文としての原体を施文している特徴をもつ。沈線で渦巻意匠が描出される 69 とは時期的に差が認められよう。

8 類 (70・76) 隆帶上に刺突文がみられるもの。キャリバー型の深鉢。76は波状口縁となる。文様は渦巻文をモチーフとしており、76は頸部に口縁部と体部を区画する隆線が横走する。

9 類 (72・73) 口縁部に先端の細い工具で細かく刻目が施される。73の体部文様は粘土紐の貼付により描出される (第3群 5 類と共通)。

第III群土器 粘土紐の貼付により文様を描出する。

1 類 (75~79) 貼付後に貼付文上に繩文原体を施文する。技法としては 17 (I 群 3 b 類) 19 (I 群 4 類) 37~39 (I 群 6 e 類) 50 (II 群 1 類) 等と共通する。

2 類 (77・78・80~83) 口縁部に小波状に粘土紐が貼付される。体部は L R 単節繩文の縦位施文が多い。83は頸部に沈線が横走し口縁部と体部を区画する。

3 類 (84・85) 口縁部が肥厚し、口唇部に「S 字」をモチーフにした粘土紐の貼付がみ

られる。

4類 (86・87) 口縁部に横位に数条貼付される。86はI r 繩文の縦位施文、87は頸部に沈線が横走し、体部文様は沈線で描出され、第IV群1類と共通する。

5類 (88・89) 口縁部から体部文様が貼付のみで描出される。両者ともキャリバー形の深鉢である。88は口縁部に爪形撚糸文、刻目が施され、体部は撚糸地文となる。

第IV群土器 粘土紐貼付とその側縁・両側縁を沈線で調整することにより文様を描出する。

1類 (90) 口縁部から縦方向に文様が展開する。粘土紐貼付上に原体が施文されている。同群2類にみられる「十文字文」などは描出されない。

2類 (91~93・103・107・113) 口縁部から体部に十字文・クランク状文が流動的に描出される。93・103・113は体部片であるが、口縁部にS字状の隆線がデコレーションされる土器(第IX群)との組合せも考えられる。

3類 (94~102・104~112) 基本的にはキャリバー型の深鉢で頸部に口縁部文様帯と体部文様帯を区画する沈線あるいは貼付文が数条横走する。体部は、頸部から縦方向に単位性を持ちながら展開し、各区内でさらに渦巻文・クランク状文が描出される。地文はL R・R Lの単節繩文が主に縦位方向に施文される。

4類 (114・115) 貼付後の調整が顕著なもの。

第V群土器 半截竹管を用い半隆起文や並行沈線、C字状爪形文を描出する。

1類 (116・117) 口縁部から体部文様が半隆起文とC字状爪形文で構成され、平行沈線・細い半截竹管の爪形文の充填がみられる。竹管沈線は施文後丁寧に調整される。

2類 (118・119) 半截竹管による平行沈線が施文される。地文はR L繩文の縦位施文。

第VI群土器 沈線を主体文様とする一群。

1類 (120~123・126・127) 口縁部に十字文・クランク文・平行沈線文や隆帶による文様が構成される。頸部は沈線が横走し、幾何学文が描出される。

2類 (124・128~131) 体部片。十字文・渦巻文・S字状クランク文が描出される。

3類 (125) 口縁部に楕円の枠状文が構成され、口縁部下位は沈線が横走する。

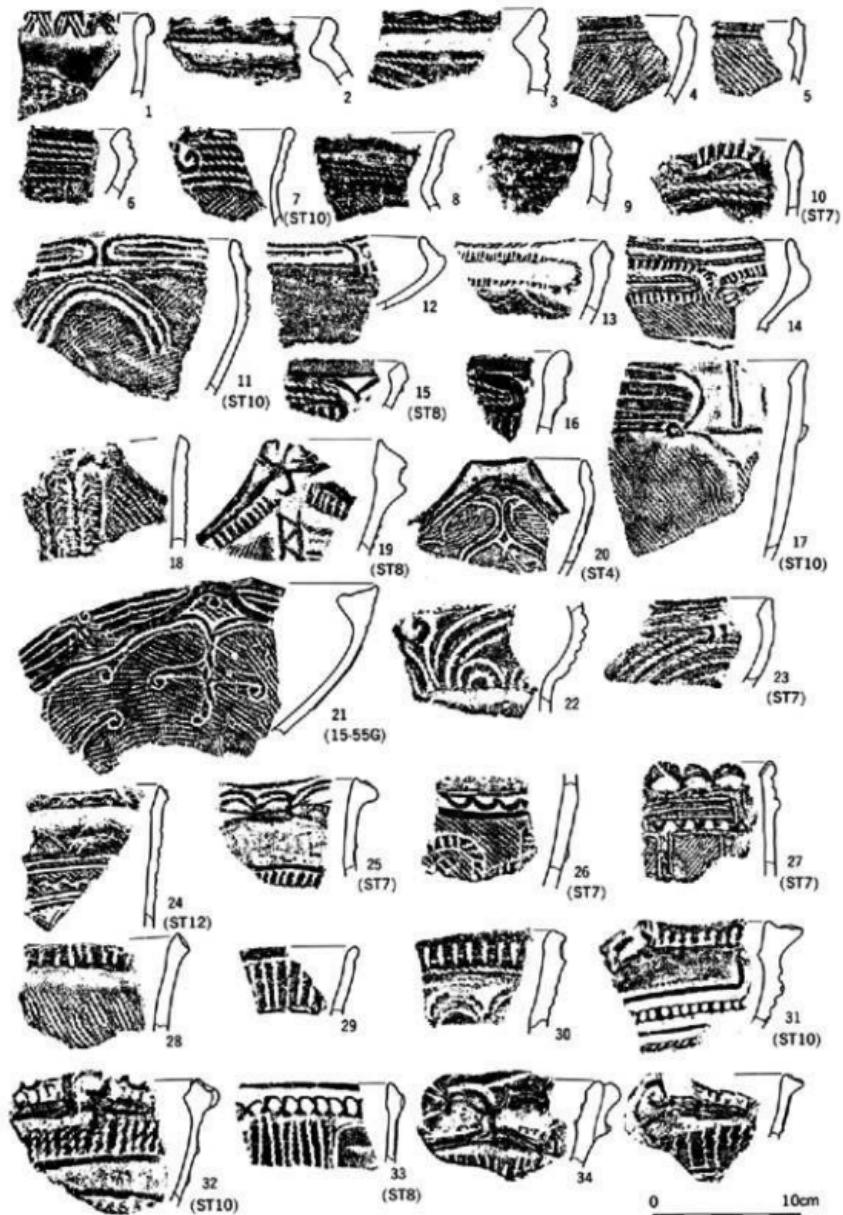
4類 (132・133) 直線・渦巻によるフジズル文が描出される。体部片である。

第VII群土器 隆起線あるいは隆帶をもって文様を構成する。

1類 (134・135) 口縁部に隆帶による渦巻文がつく。頸部には沈線が数条横走し、さらに体部文様が描出される。

2類 (137・138・143) 口縁部に横位に隆帶がつけられる。

3類 (139・140) 口縁部が肥厚し、口唇部に隆帶による楕円の枠状文がつけられる。140



第8図 土器拓影図
第I群土器

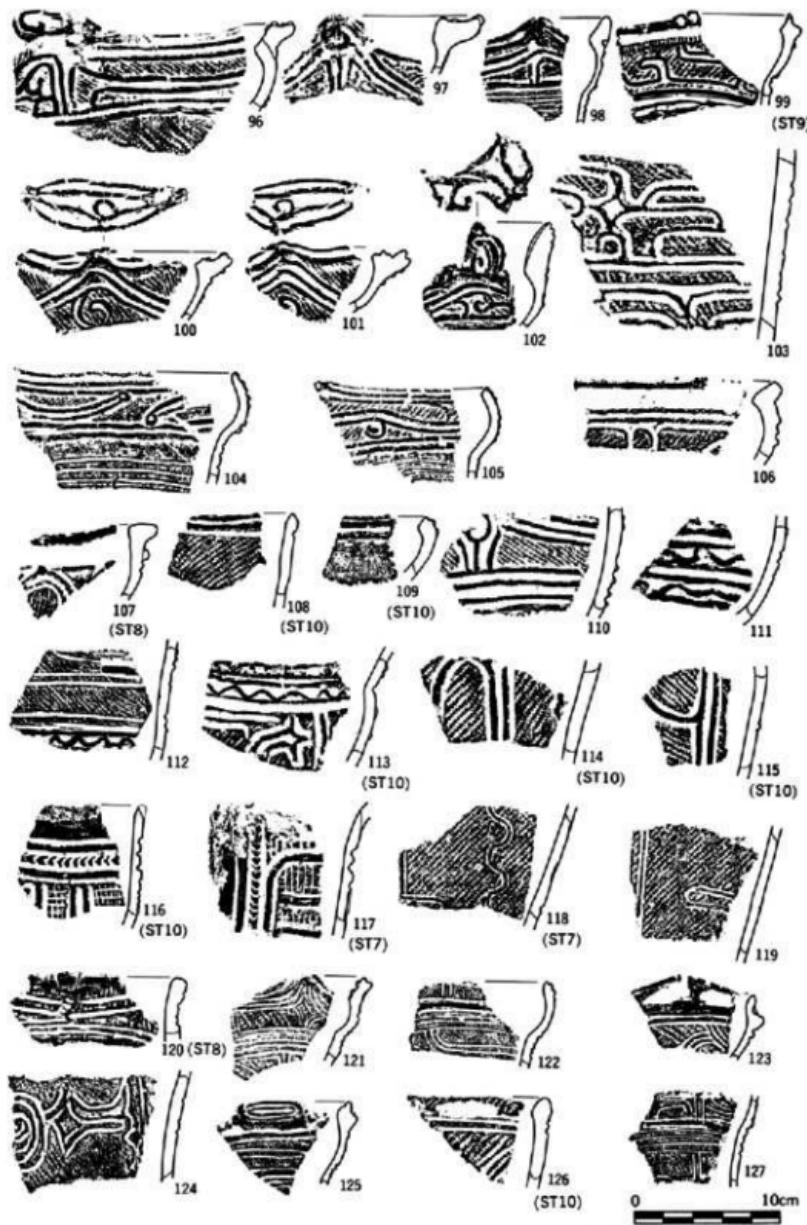


第9図 土器拓影図(2)

第I群土器(36~49) 第II群土器(50~60)

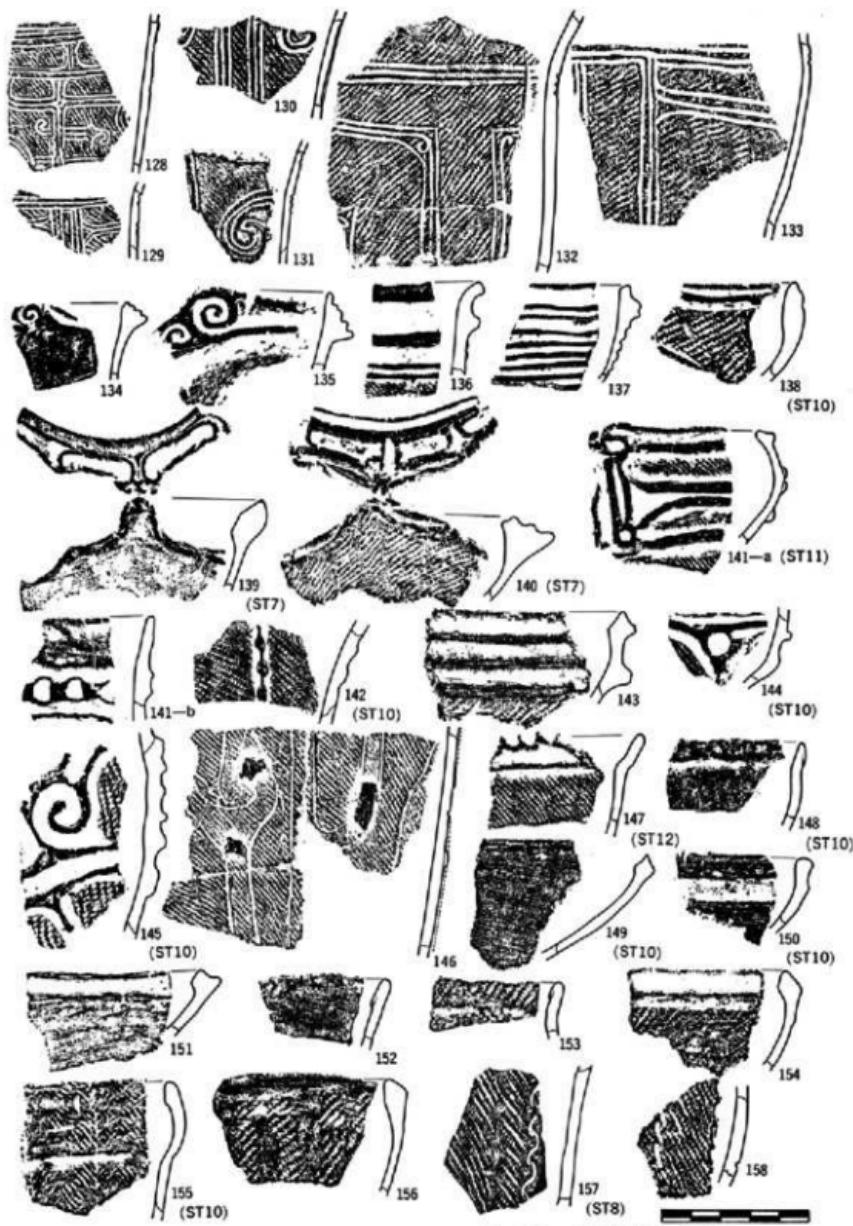


第10図 土器拓影図(3)
第II群土器(62~76) 第III群土器(77~89)
第IV群土器(90~95)



第11図 土器拓影図(4)

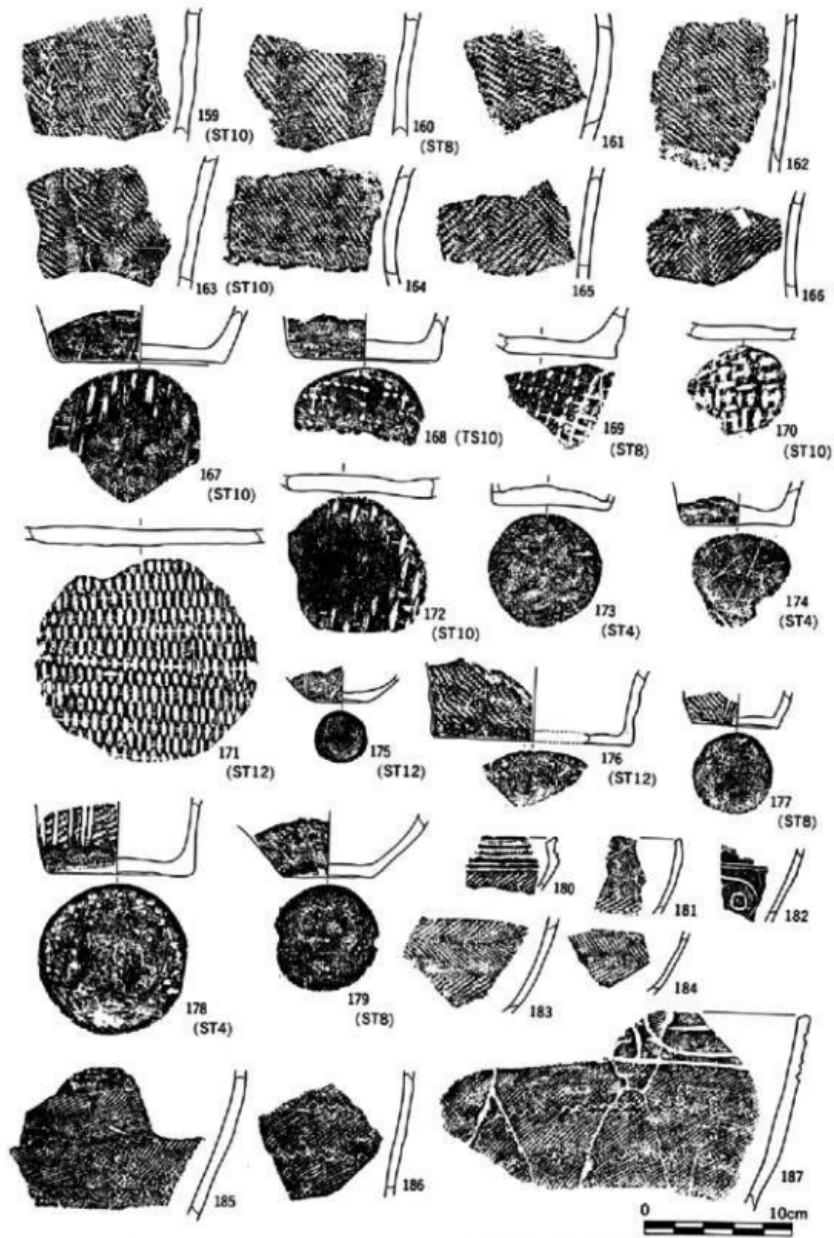
第IV群土器(96~115) 第V群土器(116~119)
第VI群土器(120~127)



第12図 土器択影図 (5)

第VII群土器 (128~133) 第VII群土器 (134~150)

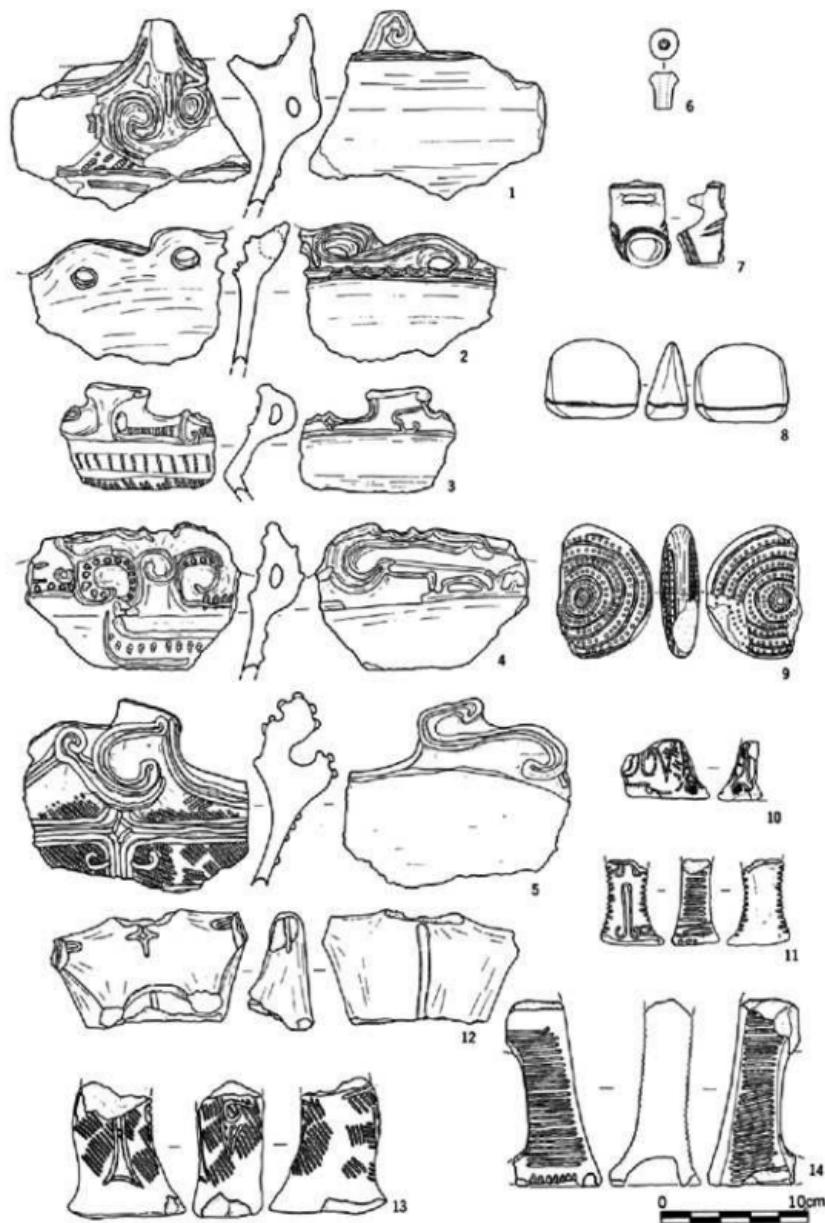
第VII群土器 (151~158)



第13図 土器折影図 (6)

- 26 -

第VII群土器 (159~166) 第IX群土器 (167~179)
第X群土器 (186~187)



第14図 土器実測図(1)・土製品・石製品

は地文は R L 繩文の縦位施文。

4 類 (141—②・142) 口縁部あるいは体部に粘土紐貼付による隆帯をつけ、その上を指押する。142は地文 L R 繩文、縦位施文。

5 類 (141—①) ボタン状の円形文と曲線で文様を構成する。キャリバー型の深鉢。

6 類 (144・145) 隆帯とその両縁が丁寧に調整され、溝巻文や円形文が描出される。

7 類 (146) 器面全体に L R 繩文が縦位に施文され、その後沈線により上方から垂下する巾 2 cm 程の文様が描出され、沈線区画内に薄く隆帯が貼付される。隆帯のほとんどは剥落している。本遺跡で 1 例のみ出土した。

第VII群土器 無文・地文繩文のものを一括する。

1 類 (147・154~156) 口縁部無文で体部以下繩文地文のもの。147は波状口縁で R L 繩文の縦位施文、154は L R 繩文、155は I r 繩文でキャリバー形となる。

2 類 (148・152・153) 折り返し口縁を有する。148は外側に、他は内側に折り返される。

3 類 (149~151) 口縁部から体部が無文のもの。

4 類 (157~159) 繩文地文に結節文を伴う。いずれも縦位方向の施文である。

5 類 (160~166) 繩文地文のもの、縦位施文が主である。165は 2 種の原体を使用、166 は結節による羽状繩文。

第IX群土器(第14図 1~5) 口縁部に隆帯による溝巻や S 字を意匠としたデコレーションがつく。大形の深鉢で、頭部以下は第II群 8 類、第IV群 2 類等との文様描出の組合せを考えられよう。

第X群土器 底部を一括する。

1 類 (167・170・172) 網代圧痕。割竹状の材を用いての網代編みがみられる。

2 類 (168・169・171) 簾状圧痕。竹ヒゴや割竹状の材を用い紐編みをするもの。

3 類 (173・174) 木葉痕

4 類 (175~179) 無文。底部成形後、みがきにより調整されるもの、磨耗が激しいものを含む。

第 XI群土器 (180~187) 繩文時代後期から晩期の土器を一括する。本調査では量的に極めて少ない出土である。180は口縁部に平行沈線が横走し、刺突文がつけられる。体部は繩文地文となる。181は沈線意匠による玉抱き三叉文の一部分と考えられよう。183~184 は横位の羽状繩文、185~187は結節綾絡文を伴う横位の L R 繩文が体部全体に施される。

以上、本遺跡出土の土器片について文様描出、施文法により類別を試みた。当然一個体の土器を想定した場合、各群・各類での組合せが考えられるが、その点については第V章まとめで触れることとする。

(b) 完形土器・土偶・土製品・石製品

完形土器 (第15~17図 図版14・15)

0 1 (第16図) 口径32cm

平口縁である。体部下半は欠損しており不明。文様は口縁部で間隔を置いて小波状文の上下を交互刺突し、さらに頸部から体部の文様帯を区画する刺突文、その刺突文から垂下する「Y字状文」の隆線と沈線が描出される。文様区画は4区画であり、その間に弧状の沈線が施される。地文は縦位の単節繩文で、結節による羽状繩文となる。

0 2 (第16図・図版14-2) 口縁部欠損。底径12.8cm

口縁部欠損の深鉢。体部上半に最大径をもち34cmを計る。地文はL R単節斜繩文である。

0 3 (第16図・図版14-1) 口径40cm

平口縁で口唇部に4個の小隆蒂がつくものと考えられる。体部下半は欠損。口唇には「S字状」や円状をモチーフとした小隆蒂がつけられ、さらに縦位並列の撫糸が圧痕される。口縁部は沈線による複連弧文が描出される。頸部は粘土紐貼付による小波状文が構成され体部文様帯と画する。体部は頸部から垂下する沈線により文様が構成される。やはり4単位で横に展開するものと考えられるが不明である。地文は口縁から体部とともに縦位L R纏文が施される。地文としての纏文施文は、口縁部から頸部では沈線あるいは貼付による文様描出後におこなわれており、貼付文上や沈線内に認められる。

0 4 (第15図・図版15-2) 口径9.5cm 器高13cm 底径6cm

口唇部に渦巻状の小突起が一個つく。文様はすべて沈線で描出される。器形は、口縁部がふくらむキャリバー形で、文様帯は口縁部・頸部・体部と明瞭に画される。体部文様帯は頸部の沈線から4単位に垂下し、各単位枠内に渦巻文、曲線による幾何学意匠文等が描出される。地文は縦位施文のL R単節繩文である。第VI群4類と共通する。

0 5 (第15図・図版15-1) 口径10.5cm 体部以下欠損

口縁部がふくらむキャリバー型を呈する。口唇部に2個の渦巻意匠が調整された貼付文によりつけられる。口縁部は粘土紐貼付+両側縁調整の技法で横方向に展開する文様が描出される。頸部は沈線が横走し体部と口縁部の各文様帯を画する。地文は斜位L R単節繩文である。

0 6 (第15図・図版15-5) 推定口径13cm 器高17cm 底径5.4cm

口縁部がふくらみ、体部が張る。口唇部に小突起が1個つく(1/2欠損のため欠損部不明)口縁部は粘土紐貼付+側縁調整、頸部以下は沈線で文様を描出する。体部文様は頸部沈線より3本単位で垂下する沈線により縦に4区画され、区画内で主に渦巻文等の意匠が描出される。第IV群3類と共通する。

0 7 (第15図・図版15-3) 口径15cm 器高12.5cm 底径5.2cm

口縁部がふくらみ、体部が張る。口唇部に過巻文をモチーフとする小突起が4個つく。口唇部には横位の撫糸圧痕が施される。頸部に沈線が横走し粘土紐貼付の口縁部文様帯と沈線で文様を描出する体部と画する。口縁部は横に展開する渦巻意匠、体部は頸部沈線より3本単位で垂下する沈線により縦位に4区画され、区内で主に渦巻文、十字文等の意匠が展開する。地文は口縁～体部すべて縦位LR単節繩文。第IV群3類と共通する。

0 8 (第15図) 底径4cm 口縁部・体部上半欠損。

ミニチュア土器である。体部文様は4単位に区画された内に渦巻意匠が沈線で施文される。

0 9 (第15図・図版15-4) 口径12.5cm 器高18cm 底径6.4cm

口縁部がふくらむキャリバー形の深鉢、口縁部に1条、頸部に3条沈線が横走する他は繩文地文である。地文は口唇の無文帯を除き、口縁部から体部に縦位のLR単節繩文が施文される。

0 1 0 (第15図) 口縁部・体部下半欠損。

大型の深鉢。頸部に太い沈線が2条走る(半截竹管の背面使用)。体部はLR単節繩文が縦位・斜位に施される。

0 1 1 (第17図・図版15-7) 底径10.6cm 口縁部から頸部欠損。

体部上半が膨らむ。頸部に数条の沈線が横走し、口縁部と体部の文様帯を画する。文様は頸部沈線より垂下する3本単位の沈線により横に大きく2単位に区画され、区内で渦巻文が描出される。地文はLR繩文の縦位施文で、文様描出前に施される。

0 1 2 (第17図・図版15-6) 底径11cm 底径部から体部上半欠損。

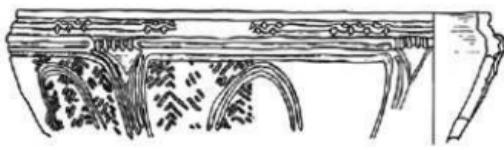
体部下半に膨らみをもつ。3本単位の沈線により体部文様は大きく2単位で構成され、縦方向と横方向に渦巻文あるいは円形文をモチーフとして展開する。地文はRL繩文の縦位施文。

0 1 3 (第13図・図版15-8) 口径18cm 体部下半欠損。

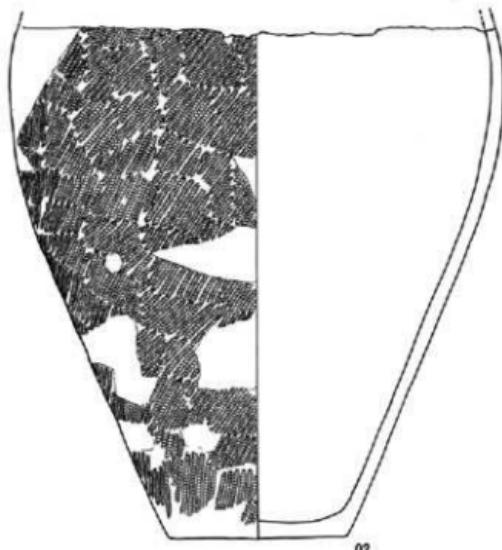
口縁部に2条の沈線が横走し、4個の小突起で渦巻状を呈する。文様はこの小突起から3本単位で垂下する沈線により4区画され、この沈線上半より区内に右斜下に向けて渦巻文を先端にもつ沈線が2本単位で派生する。地文は横・斜位のLR繩文である。

0 1 4 (第17図・図版15-9) 体部上半および下半欠損。

朝顔型に口縁のひらく深鉢。体部文様は、調整が加えられた隆線と沈線による渦巻意匠の文様が描出される。基本的には横に4区画される文様を構成するが、一部で各文様は連結する。



01



02



—
I
—



—



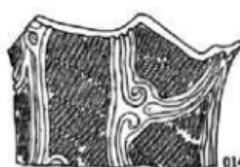
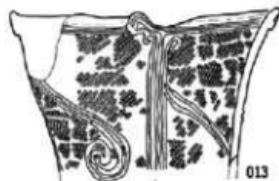
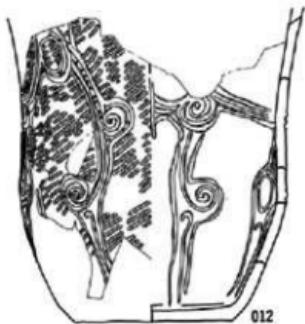
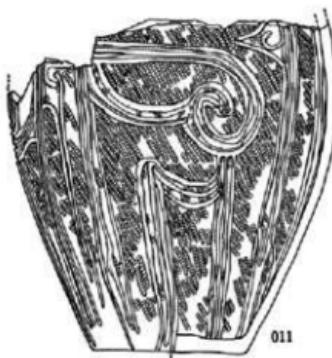
03

0 10cm

第15図 土器実測図（1）



第16図 土器実測図（3）



0 10cm

第17図 土器実測図 (4)

土偶・土製品・石製品（第14図 図版16・17）

土偶 全体で5体出土した。いずれも欠損している。

(10) 脚部先端。沈線により渦巻文、幾何学文が描出される。一部に単節繩文の施文が認められる。

(11) 脚部。前面と背面に棒状工具先端による沈線が横位に施される。側面には渦巻文を意匠した文様がつけられる。

(12) 板状土偶の胸部片。残存部肩幅13cm・胸部先端での厚さ4cmを測る。胸部上位に沈線による十字文、肩部にも沈線による文様が描れる。乳房下位および背面には縦に一条沈線が垂下している。

(13) 脚部。沈線により渦巻文・幾何学文が描出される。単節繩文の施文も認められる。

(14) やや大型の土偶の脚部。前面と背面に沈線が模位に25~30条施文される。脚部底面は2cm程内側へ抉れている。

土版 (9) 径9cm・厚さ2.6cm。約1/3欠損。両面に沈線で6個の同心円が描かれ、沈線間は先端の丸い工具で刺突される。中心部は径3~5mmの孔が貫通している。1点出土。

耳栓 (6) 全体の1/4が円筒状、残り3/4が外側に広く。小径1.2cm・大径1.8cm・長さ2.4cmで、径6~8mm程の孔が貫通する。全体に酸化第2鉄が施されている。1点出土。

土製円盤 (図版17-4・5) 2点出土。4は径4.7cmで磨滅が激しく地文は不明である。5は径5.5cmで地文はLR単節繩文。共に土器體部片を打ち欠いて成形している。

石製品 (8) いわゆる石冠といわれるものである。下半に横に一条沈線が施される。

その他、注口様土器が1点出土した。器面には沈線で文様が描出される。注口部上位に小さい把手がつく。

表-3 完形土器・土製品・石製品出土地点一覧

擲図一番号	種別	出土地点	備考	擲図一番号	種別	出土地点	備考
15-01	完形土器	ST10・Y	R P83-a 大木 8b	17-014	完形土器	16-15 G	
15-02	"	ST10・Y	R P83-b 大木 8b	14-6	耳栓	ST11・F	朱塗
15-03	"	ST12・F	R P156 大木 8a	14-7	注口土器	ST7・F	大木8b
16-04	"	ST9・Y	R P77 大木 8b	14-8	石冠	ST10・F	大木7b~8a
16-05	"	ST9・Y	R P75 大木 8b	14-9	土版	ST4・Y	大木8
16-06	"	ST9・Y	R P112 大木 8b	14-10	土偶	ST9・F	大木8b
16-07	"	ST1・F	R P35 大木 8b	14-11	"	14-51 G	大木8a~8b
16-08	"	ST5・F	—— 大木 8b	14-12	"	ST1・F	大木8a
16-09	"	ST9・F	R P73 大木 8b	14-13	"	15-53 G	大木8b
16-010	"	ST9・F	R P76 大木 8b	14-14	"	15-53 G	大木7b
17-011	"	ST9・F	R P72 大木 8b	17-4	土製円盤	15-55 F	——
17-012	"	ST9・F	R P160 大木 8b	17-5	"	ST11・F	——
17-013	"	ST3・Y	R P152 大木 8b				

* ST10・Y-10号住居跡床面出土 ST1・F-1号住居跡覆土 16-15G-16-15グリッド

(C) 石器 (図版18~21)

今次調査で出土した石器は整理箱で5箱で量的には少ない。器種別に石鏃・石錐・石匙・箇状石器・搔器・磨製石斧・石棒・石錐・磨石・凹石に分けられる。打製石器は頁岩が主体を占め、黒曜石が1点含まれる。また磨製石器・礫石器では安山岩・花崗岩等を素材としている。

石鏃 (図版18-1~3) 3点出土。二等辺三角形を呈し、えぐりが深い。硬質頁岩。

石錐 (図版18-5~8) 5点出土。4・7は基部欠損。いづれもいわゆるawlで断面は四角・三角形を呈する。5は特に磨滅が激しく穂は丸味を帯びている。

石匙 (図版18-9~14) 刃部がつまみに対し軸に平行する縦形石匙(10), 軸に直交する横形石匙(11), 軸に斜行する石匙(9・12・13・14)に類別できる。

箇状石器 (図版18-15~19) 断面が凸レンズ状を呈し、腹面・背面から調整される。

搔器 (図版20~22) 刃部の作り出しが比較的粗雑であり、片面に調整加工が施される。不定形である。図版掲載資料の他、二次加工の認められる剝片、使用痕のある剝片が全体で9点出土している。形状・刃部調整は規則性が認められない。

摩製石斧 (図版19-1~12・16) 13点出土。6のみ完形品で他はすべて欠損している。材質は蛇文岩、緑泥片岩等が用いられている。

石棒 (図版19-13・14) 13は完形品、長さ28cm・太さ7.5×6cm、断面は隅丸の長方形を呈する。14は欠損品、現存長12.5cm・太さ12×9cm、断面は隅丸の長方形。

石錐 (図版19-15) 不定形の楕円形を呈し両側縁に1ヶ所づつ打欠けられてえぐりが入る。長軸15cm・短軸8.5cm・厚1~1.5cm・重量275g。1点出土。

表-4 磨石計測一覧

磨石 (図版19-17~23・図版20-1~14) 21点出土。磨面の状況により1類：礫全面がきめ細く磨られる。形状は定形化する。2類：部分的に磨面が認められる。

3類：不定形で磨面が不明確なもの。右一覧表参照

番号	分類	重さ(g)	番号	分類	重さ(g)	番号	分類	重さ(g)
20-17	1	1411.6	21-1	2	397.0	21-8	3	1134.9
20-18	2	488.5	21-2	2	636.5	21-9	2	722.0
20-19	2	531.4	21-3	2	794.0	21-10	2	422.3
20-20	2	1963.0	21-4	2	517.0	21-11	2	680.5
20-21	2	755.8	21-5	2	709.1	21-12	2	266.1
20-22	2	492.0	21-6	2	745.5	21-13	2	295.8
20-23	2	933.0	21-7	2	681.0	21-14	2	588.5

番号：20-12は磨石20-13の石を示す。重さはgである。

凹石 (図版20-15~18・図版21-1~22) 円形・楕円形(長楕円形)・不定形の形状を示す。全体で57個出土。凹の数により10類に分けられる。図版20中の(1-0)は前面に1、背面に0の凹を有することを示したものである。10類とは(1-0・4個)(1-1・9個)(1-2・3個)(1-3・2個)(2-0・5個)(2-2・12個)(2-3・11個)(3-3・2個)(両面多凹・5個)(不明4個)である。このうち、(1-0)(1-1)には不定形なものが多く、(2-0)には長楕円形のものが多い特徴がある。また、凹部分の断面は丸くなるもの、逆円錐状となるもの、不規則に浅く凹むものなどのバリエーションが認められる。

V まとめ

今回第2次発掘調査した原の内A遺跡は、尾花沢盆地の南東部に位置し、丹生川の左岸の河岸段丘上に立地する、縄文時代中期中葉の集落跡である。本遺跡である。本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡12棟・不明遺構2基であり、出土遺物は主に土器・石器で整理箱にして約90箱を数える。

今回は、尾花沢市鶴子地区に昭和57年度に一般県道尾花沢～鶴子線道路改良事業に係る緊急発掘調査を実施したものであり、これら記録をまとめたものが本報告書である。

1 遺構について

今回の調査で検出された遺構のすべては、B地区の拡張区に偏在し分布している。時期には、縄文時代中期中葉と晩期初頭の二時期に大きく区分され、住居跡はさらに型式別にみると三時期に分けられる。

住居跡 第I期（縄文時代中期大木7b式期）は、拡張区の北側の緩傾斜に位置し、10号住居跡の軒のみ検出される。平面形は不整の楕円形を呈し、炉跡は確認されていない。柱穴の配置は、住居跡の中央部に余り認められず、中央部の北寄りや東壁寄りから南壁寄りにかけて在り、ほぼ台形状に巡っており、各柱穴が東西・南北に分けられ対応し、さらに西壁に沿って配列している。これら柱穴は、主柱様の柱穴が壁寄りに配列しているが特徴である。10号住居跡は、柱穴の配列状態からみて、南西側に1回拡張している住居跡である。埋設土器は、土器の底部に炭化物が付着し、骨片や骨粉がみられず、その類似例が少ないが、おそらく貯蔵用の施設と考えられる。

第II期（縄文時代中期大木8a式期）は、4・6・8号住居跡で、拡張区の中央から東側にかけて分布している。平面形はおそらく不整円形や円形および楕円形を呈しており、6号住居跡のみ炉跡（地床炉）が検出されている。柱穴の配列状態は、8号住居跡では不規則的に配置され不明瞭であり、4・6号住居跡では、おそらく住居跡の中央部で4～6本の主柱穴が環状に巡り、支柱穴は壁際あるいは壁に接して壁に沿うように配列していると考えられる。

第III期（縄文時代中期大木8b式期）は、2・3・5・7・9・11・12号住居跡で、拡張区の中央から西側半分域にかけて分布している。平面形は、円形・不整円形あるいは楕円形を呈しており、5号住居跡は円形、4・9号住居跡は隅丸方形状になる円形を、3・11・12号住居では不整円形を、2号住居跡では楕円形をそれぞれ呈している。炉跡が検出された住居跡は2・9・11号住居跡でいずれも石闇炉である。これら住居跡の配列状態は、

大きく3形態に分けられる。1・2号住居跡は中央部に4～6本の主柱穴群を巡らし、壁寄りに沿って支柱穴を配し、山形市熊ノ前遺跡112号住居跡に類似し、7号住居跡は主柱穴を壁付近に配列しており、村山市古道遺跡7・8号住居跡に共通する構造である。9号住居跡は方形状になる隅部に主柱・支柱穴を三角形状あるいは逆三角形状に配し、炉跡を中心に支柱穴を並行に配列しているのが特徴である。

炉 跡 2・4・6・11号住居跡より検出され、6号住居跡の炉跡（E L16）は地床炉跡で他は石囲炉（E L13～15）である。E L13～15は住居跡の中央部よりも壁付近に位置するのが特徴である。E L14は正方形に礫を配し長さ56cmである。古道遺跡2号住居内炉跡の形状は北半部がやや丸味を呈しているが、形状や規模など類似点が認められ、いずれも底面が良く焼成されている。E L15は、やや不規則的に礫が配され平面形は長方形を示しており、古道遺跡5号住居跡内炉や熊ノ前遺跡112号住居跡炉と類似性がある。

不明遺構 平面形は不定形を呈し、壁や底面の掘り込みの状態は不規則であり、覆土中に黄褐色砂質土やブロックが多量に含まれ、時期は縄文時代大洞B式期に属するものである。本遺跡の第1次発掘調査時でも、S X23・24として検出例がみられ、今次調査でもS X17・18があり共通性を持ち、風倒木の痕跡と考えられる。

2 遺物について

今次調査で出土した遺物は土器・土製品・石製品・石器等で、ほとんどが土器である。

土 器 出土した土器は、描出された文様や施文技法により第I群から第XI群まで分類した。本報告書に掲載した土器拓影図は主に9号住居跡覆土出のものを選び出し、さらに全体の土器を観察した上で9号住居跡出土以外の文様要素等をもつものを選び出し掲載した。そのため、各住居跡ごとの出土遺物については細かく言及はできなかったが、本遺跡出土土器全体のバリエーションに関しては概観されよう。

第I群土器は主に大木7b式に比定できる。I群6e類は粘土組貼付による連弧文や渦巻文、あるいは隆帯によるS字をモチーフとした突起がつき、大木8aに比定できよう。

第II群土器は刺突・刻目文のみられる一群だが時期的には幅をもつ。口唇に粘土組貼付によるS字文・十字文等の隆線等が描出されるII群3類、刺突文の他に沈線による渦巻文が描かれるII群8類はなどは大木8a式期に比定でき、他は大木7b式期に比定されよう。

第III群土器は大木8aを中心である。

第IV群土器のうち1類はやや古い要素をもつ。IV群2類は大木8a式、3類は大木8b式に比定できよう。

第V群土器は北陸系の竹管による半隆起文を主体とする土器の系統を引く。新崎式の影

響を設けており、時期的には大木 8 a 式のやや古手のものと併行しよう。

第VI群土器は4類が大木 8 b 式、他は 8 a 式であり、2類は口縁部はS字状の隆帯、あるいは渦巻文・小波状文の貼付などと組合さる大木 8 a のテビカルなものと言えよう。

第VII群土器はいづれも大木 8 b 式の中で把えることができる。136・137についてはやや古い時期が考えられる。VII群 7 類とした146は文様としては大木 8 b の新しい時期として把えられるが、施文技法一沈線区画内に隆帯貼付一に特徴をもつ。

第VIII群土器はいづれも大木 7 b 式あるいは 8 a 式の体部地文である。

第IX群土器は大木 8 a 式に盛行する大型の深鉢口縁の隆帯・突起である。

第X群土器 8 a 式に盛行する大型の深針口縁の隆帯・突起である。

第XI群土器は本調査のB地区南側の土塹およびその周辺出土で、後期末～晩期中葉を一括して扱った。宮戸III式から大洞B式に比定される。

完形土器・土製品・石製品

表-3に示した通りである。15図-01は大木 7 b 式でもやや古手、15図-04は大木 8 a 式の古手として把えられる。ST9出土の16図-04・05・09～012は大木 8 b の中でもやや古く、8 a の要素を色濃く残した一群といえよう。

土製品はこの時期に多い土偶、耳栓の他、土版が注目される。文様描出、あるいは出土状況から大木 8 式期の所産であろう。また、石冠は比較的雑な作りであるが、類例は鶴岡市岡山遺跡・最上町水木田遺跡等に見出され、時期は大木 7 b ～ 8 a 式期の所産である。

石 器

石器は打製石器の数が少ないので特徴である。トゥールは総数で31点、調整のある石鎌・石錐を除くと粗雑である。資料が少なく、遺跡についての石器のあり方についての言及は避けたい。凹石はその凹部分の数により10類に分けたが、さらに凹部分の形状、つまり丸いもの、逆円錐状のもの、凹部が浅く不規則なものなどの別が認められた。これは直接機能に関するものと考えられる。

また、磨石についても、磨面の状況、あるいは形状より3類に分けたが、これもセットとなる石皿の出土はないにしてもやはり機能的な相違により生じたものと想定できよう。

（参考文献）

- 馬日原一也 1975 「大木貝塚調査報告書」 いわき市教育委員会
名和連朝他 1975 「岡山遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会
阿部明彦他 1975 「上山市牧野道路」 上山市教育委員会
名和連朝他 1977 「主要地方道発掘調査報告書—古道遺跡—」 山形県教育委員会
佐藤正俊他 1979 「熊ノ筋遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会
長崎 至 1981 「思い川A遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会
会田久一郎 1981 「思い川B遺跡発掘調査報告書」 上山市教育委員会
佐藤庄一 1981 「原の内A遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会
大槻 誠 1983 「市道跡発掘調査報告書」 尾花沢市教育委員会
加藤 稔他 1982 「村山市史」 別巻1「原始、古代編」 村山市
山形県教育委員会 1979 「最上町水木田遺跡調査説明資料」
〃 1982 「分布調査報告書（9）」
〃 1982 「尾花沢市いるか道跡調査説明資料」
〃 1983 「分布調査報告書（10）」



1号住居跡全景



RP 35 (1号住居跡内) 出土状况



2・3号住居跡全景



2·4·6·5号住居跡全景



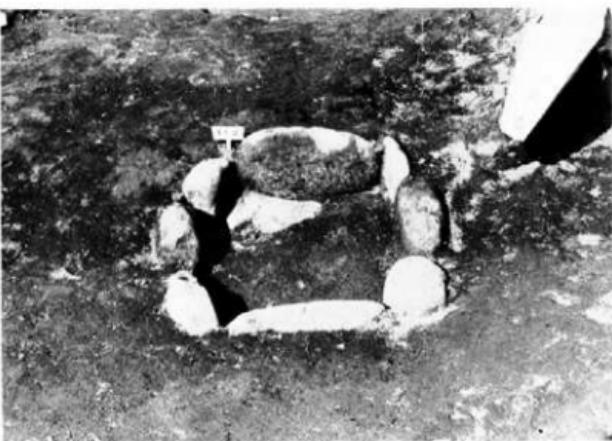
13号炉跡（2号住居跡）全景



7·8·9号住居跡全景



7・9号住居跡全景



14号炉跡（9号住居跡内）全景



PR 72~75（9号住居跡）

出土状況



10号住居跡全景



10・11号住居跡全景



RP 85 (10号住居跡内) 出土状況



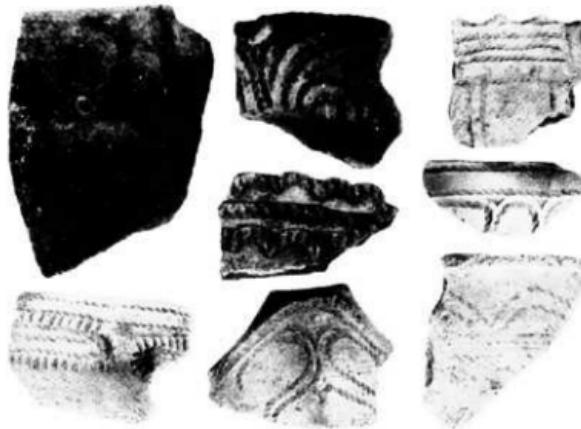
11・12号住居跡全景



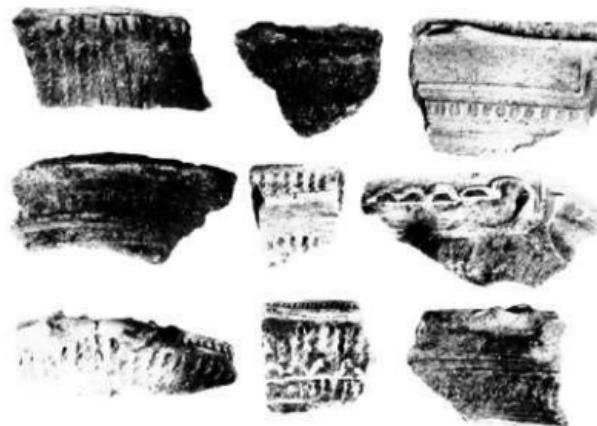
15号炉跡（11号住居跡）全景



R P 155～157（12号住居跡内）
出土状況



第 I 群土器



第 I 群土器



第 II・V 群土器



第II・IV群土器



第II群土器



第III・VI群土器



第三群土器



第三・IV群土器



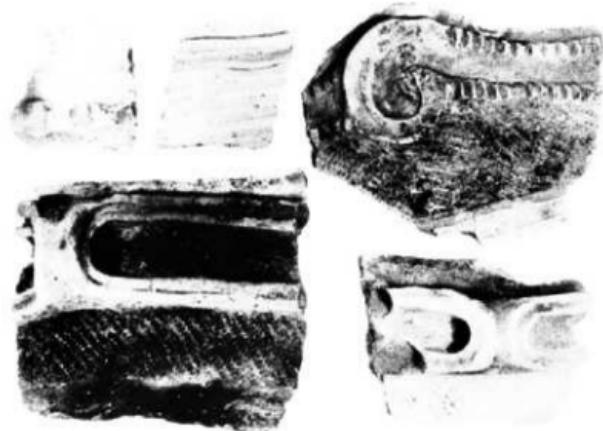
第六群土器



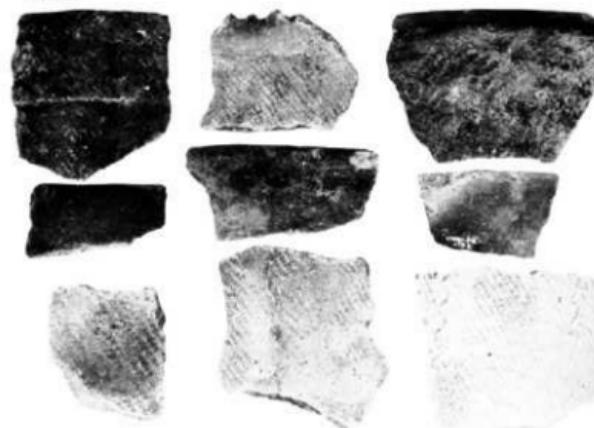
第V・VI群土器



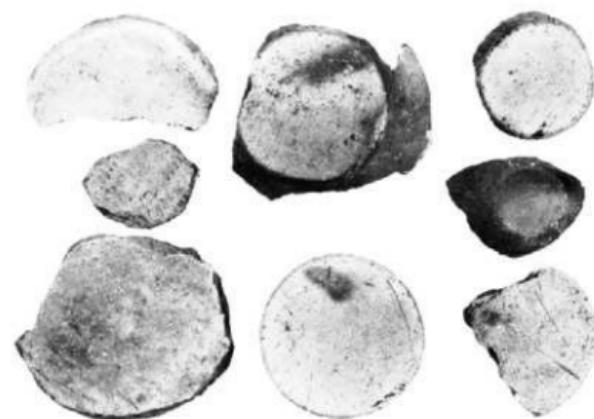
第VII群土器



第VII群土器



第IX群土器



第IX群土器



第X群土器



1



2

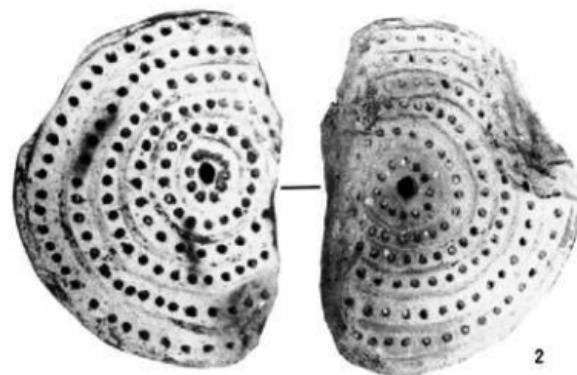


完形土器（2）





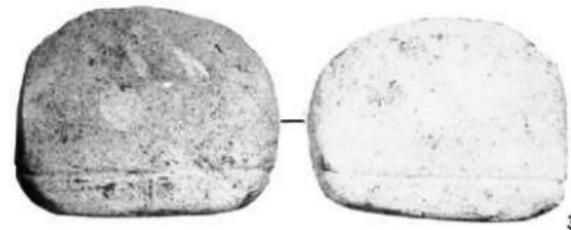
1



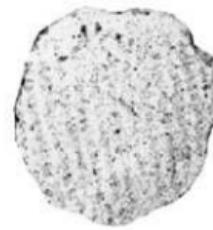
2



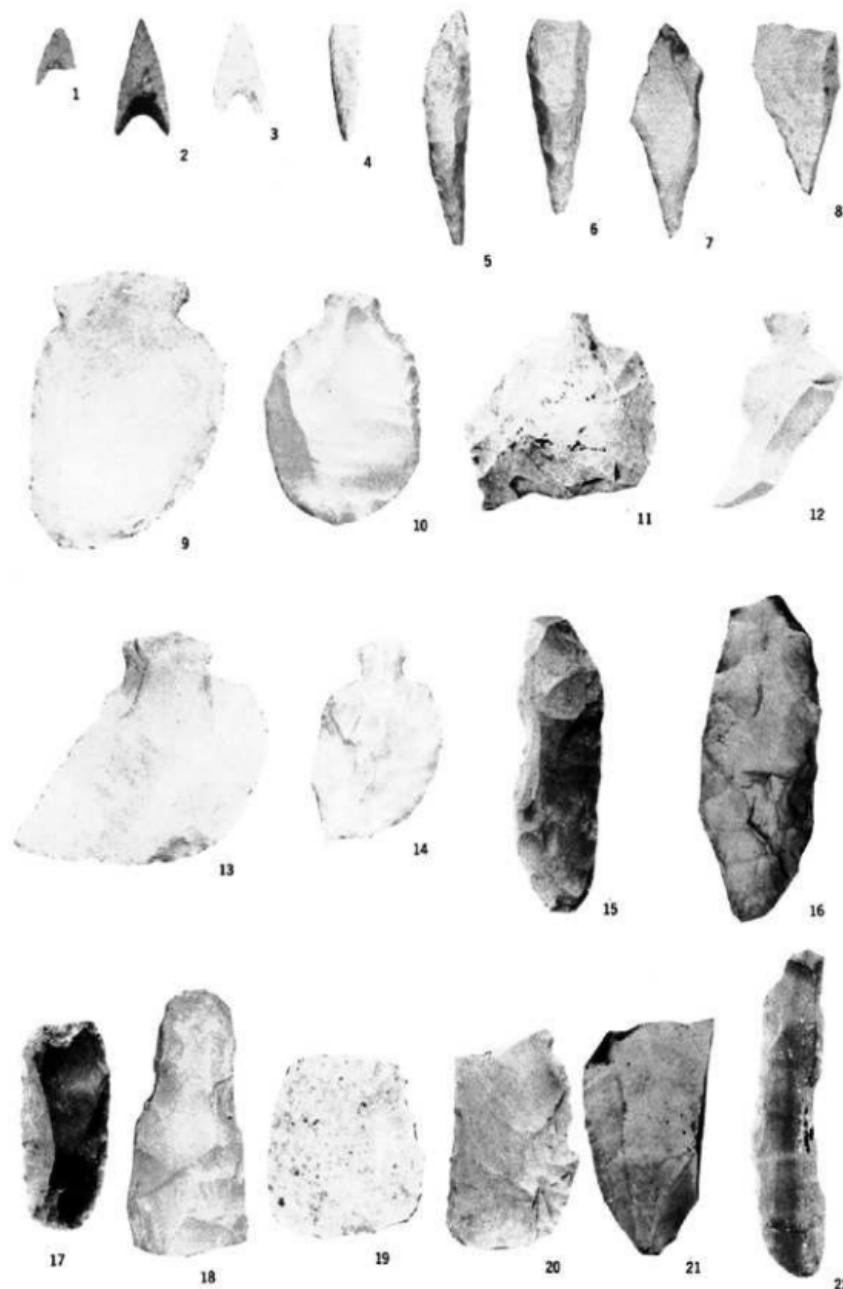
4

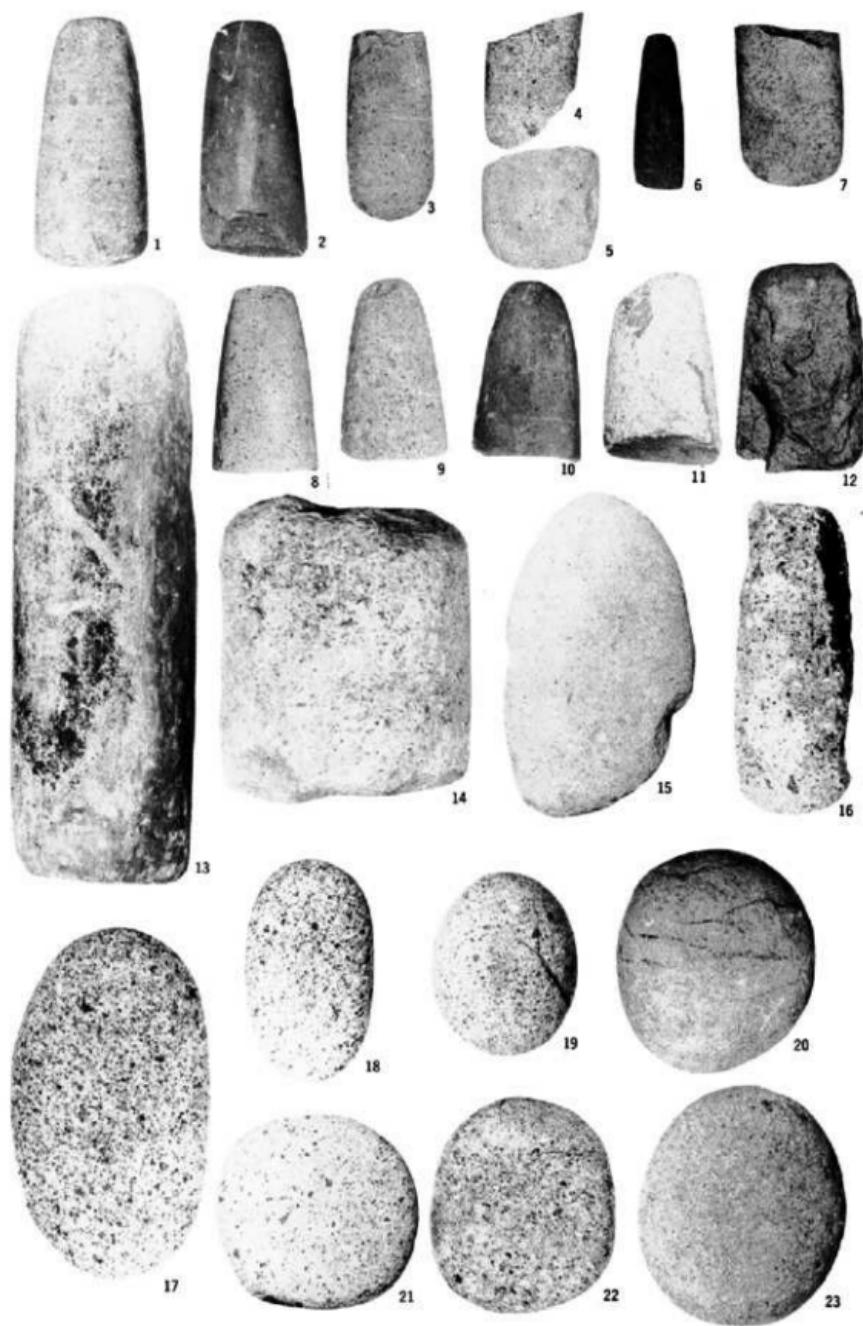


3

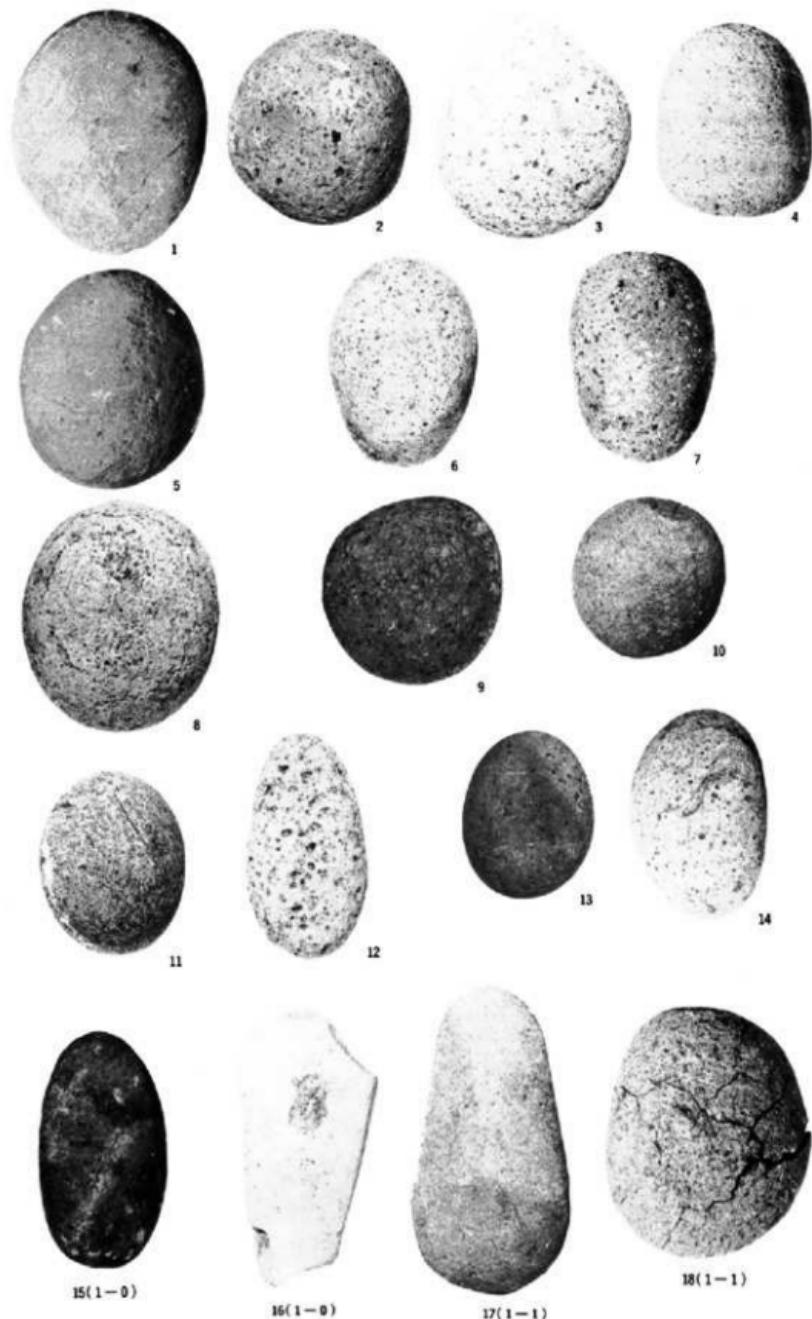


5



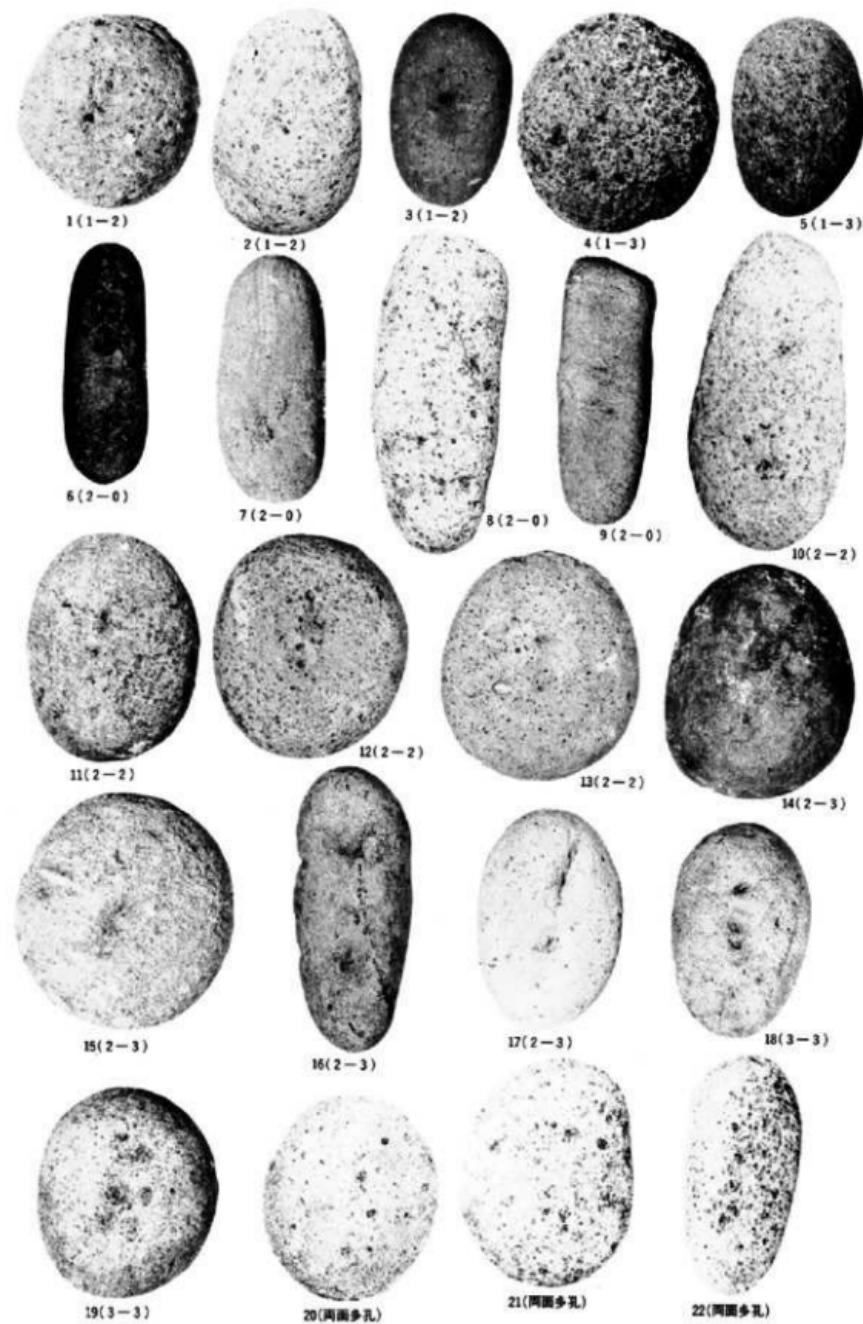


磨製石斧、石棒、石錐、磨石



※()内は表一裏の凹の数を示す。

磨石・凹石



山形県埋蔵文化財調査報告書第71集

はら うち
原の内 A 遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —

昭和58年2月21日 印刷

昭和58年2月28日 発行

発行 山形県
山形県教育委員会

印刷 株式会社大風印刷
